

---

# 非日常だとうっ？！

げんにゃん

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

非日常だとうっ?!

### 【Nコード】

N8482R

### 【作者名】

げんにゃん

### 【あらすじ】

ある日突然、家に少女が住み着いた!

ごく普通の少年の日常はどんどん変わっていく!

※ネタ等があまりないので投稿は不定期です。感想いただければうれしいです。

## 1、少女が部屋に（前書き）

ありがちなストーリーですがどうぞよろしく（o^\_^）  
b

## 1、少女が部屋に

『あ、おかえり』

少女はこちらに気づくとそう言った。

---

俺の名前は圭佑、高校2年生だ。

成績は中の上といったところか。部活はしていない。いたって普通の、目立ったことのない17歳。ただ、一人暮らしであるところが少し違うかな。

なんて、どこかのラノベにありそうな自己紹介を試してみる。

いつものように学校へ行き、退屈な授業を受け、友達と談笑、なんの問題もなく帰路へつく。

家に帰ると2階にある部屋へ。

そして夕飯を作るまでの時間を気ままに過ごす。

それが俺の日課・・・というより習性か。  
我ながら呆れるね。

だが、今日は違った。いつもの景色に加えてなにか見慣れないものがあった。

黒髪をポニーテールにした少女が俺のベッドの上で漫画を読んでいる。

しばらくその場で立ち尽くしていると、気配を察してか、少女はこちらに気づいた。

『あ、おかえり』

その言葉で我に帰った俺は、なにを言おうか迷ったが、とりあえず無難に

『いや、お前だれだよ?!』

と返した。うん、無難だ。普通な俺にふさわしい。

『あたし? あたしは、実央』

『そ、そうか。じゃなくて! えーと、実央さん? なんで俺に家にいるんだ? てか、どうやって入ってきたんだ?』

あまりの出来事について質問攻めにしてしまう。

『やだなあ、呼び捨てでいいよ。これから一緒に住もうってのに他人行儀じゃ落ち着かないでしょ?』

『なにいい???!?!住むだとう?!!』

突然意味のわからないことを言われて驚かないやつがいるだろうか。  
いや、いない。

混乱している俺に実央が告げる。

『とりあえずあたしの寝る場所として、隣の部屋ちようだいね。あたし疲れたからもう寝たいの。詳しいことは明日説明してあげるから』

『は・・・はあ』

こうして俺の非日常が始まった。

## 2、休日

結局、意味のわからないまま一日が終わり、また朝が来る。ちなみに、今は休日の8時である。

『まだ隣の部屋にあの子がいるのか・・・？たしか・・・実央、だったよな』

俺は女の子との交遊がまるでないんだ、家に上げるなんてもってのほか。

『もしかしたら夢だったかもしれないな』

いや、夢であってくれ、と願いながら隣の部屋へ。なにがあるかわからないので、念のために中の音を聞く。よし、何も聞こえないな。

そつとドアを開けて中を覗く。

誰も使っていないベッドには手を付けた様子がなくきれいなまま。部屋に何かが増えたわけでもなかった。

『やっぱり夢だよな、ハハッ』

しかしそれはそれで少し残念かもな、けっこう可愛かったし。そんなことを考えながら1階のリビングへ行くと――

『あっ圭佑！今起こしに行こうと思ってたんだよ！』

『夢じゃなかったああああ！！』

エプロン姿の実央は満面の笑みでこちらを見ている。

『なんでエプロンなんて着――なん・・・だと・・・？』

テーブルには、あ、あ、朝ごはんと思われるものが並べられているではないか・・・。

『休日でもちゃんと起きないとだめだよ？ほら、座って座って』

言われるがままに席につく。

『いただきます！』

『い、いただきます』



白米、味噌汁、目玉焼き、野菜炒めが少し。どこかの漫画にできそうだな。

10分後。

『う、うまかったぜ・・・ありきたりで改良のしようがなさそうなのに、ここまで美味しくできるものなのか』

『えへ、喜んでもらえてうれしいよ♪』

人生で最初に食べた女の子の手料理が最高にうまくて、俺、幸せです。

完食したところで実央が話しかけてくる。

『ねえ、圭佑はなんで一人暮らしなの？部屋がたくさんあるから引っ越してきたわけじゃないんでしょ？』

『両親が働き者でね。今は海外なんだよ。一応弟もいるんだが、付いてっっちゃったんだ。だから今は一人』

海外で不自由するより日本でまったりするほうが好きなんだよ、俺

は。

『そんなことより、実央はなんでうちにきたんだ？説明してくれるんだろ？』

『あ、そうだったね。じゃあ教えてあげる』

一息ついて話します。

『あたし、圭佑の嫁になりに来たの！』

『ぶっ！！よ、嫁だとお？！』

『そ！だから圭佑はあたしの旦那なの♪』

そんなこと勝手に言われてもな……。とりあえず出まかせ言っておどかしてやろう。気が変わるかもしれん。

『お前、わかってるのか？夫婦ってのは……。その、あ、あーんなことやこーんなことをするんだぞ！』

俺は大丈夫なんだろうか……。一方、実央はキョトンとした顔で言う。

『なにそれ、わかんない』

しかし、すぐに満面の笑みに戻る。

『あたしは圭佑といっしょならどんなことがあっても平気だよ♪』

俺弱すぎるな。もういいや。

『ところで、なんで俺なんかの嫁になりたいんだ？』

『えっと、それはね——？』

『？』

『・・・なんでだっけ、思い出せないや』

『？まあいいや（よくないけど）』

なんか話がややこしくなりそうなので一旦切ることにした。これ以上不意なことは聞きたくないぜ。

『とりあえず俺出かけるから。昼飯は勝手に食っててくれよ』

『えー！お昼も作ってあげようと思ったのに！どこ行くのよー』

『教えないし連れても行かないぜ。じゃあな』

『むうゝ・・・』

早く出てしまおう。

夜9時。

『ただいまーっと。ん？』

実央はリビングのテーブルで突っ伏して眠っていた。テーブルには昼飯らしきものがなぜかフルコース並の量で置いてあった。

『なんでメインディッシュが二つも――あ』

そっか、晩飯だな。まったく、しっかりしすぎだろ。とりあえずこの子を部屋に運ぶか。

結局、置いてあった食料は全部食べた。実はちょっと期待して、昼飯を抜いていたのだ。

『おれも寝るか。明日学校あるし』

明日は半日家にいなくてすむから脅威は無いな。

## 2、休日（後書き）

一応、次話から本番みたいな感じで予定しています。。。

### 3、転校生・・・?!

『実央は俺の嫁か……。悪くない……。かも?』

休日明けの月曜日というものは憂鬱なものだと思いが、なぜか今日はすっきり目が覚めた。実央はもう起きてるみたいだな、一階からいい匂いがする。

『おはよ! 圭佑♪』

『おう。うまそうだな』

『もうすぐできるからね!』

新婚生活よろしく会話する俺たちだが、実際には一昨日会ったばかりなのだ。

何はともあれ、朝飯を食い終わったので学校へ。

『よう圭佑氏! こんな時間に来るなんて珍しいな! 雪でも降るんじゃない? (笑)』

『声が大きいぞ、直樹氏。俺の耳が悲鳴をあげておるわ』

教室に入って早々にクラスメートの直樹が話しかけてくる。まったく、こいつは朝からうるさいな。ちなみに聞いた話によると、こいつの睡眠時間は夜10時〜朝5時らしい。じじいかよ。乾布摩擦でもやってんじゃないのか？

『それよりさ、今日、急に転校生がくるらしいぜ！なんでも女の子らしい！我等にもまだチャンスがあるかもしれない！！』

我等、というのは俺も含むクラスの十数人の男子で形成される『非リア充同盟』のことだ。

『転校生だと？いいって、どうせ無理だし』

そこでガラッという音と共に担任教師が入って来る。俺は話を聞くつもりなど毛頭ないので窓の外を眺めて思考を停止させる。窓際の席は最高だな。

『——というわけでよろしく！実央って読んでねー！』

・・・え？えええ？？

『えええええええええ？！？！？！？！』



はっ、しまった。あまりの出来事に叫んでしまった……。皆からの視線と白けた空気が俺にのしかかった。

『なんでお前が学校にいるんだ!?!』

『編入したのよ? やっぱ一緒にいられる時間は多いほうが幸せだも  
ん♪』

人気のない場所の筆頭、体育館裏である。

『はぁ……。とにかく、学校ではあんまり話しかけないでくれよ。  
俺の立場的に危ない』

『えく……。わかったよお』

俺は教室に戻る。その後ろで実央はニヤリと不敵な笑顔を浮かべていた。

休み時間の教室では転校生のお約束である質問攻めが続いていた。  
女子を中心に、男子もけっこういるな。まあ実央はかわいいからな。

『実央ちゃんってどこに住んでるの?』

『どこから来たの?』

『部活には入るの?』

『趣味は?』

よくもまあそんなに質問が湧いてくるな。ってか、直樹、がつつきすぎだろ。目が血走ってるぞ。そんなやつが目の前にいても笑って接する実央。優しいやつめ。

『でさあ実央ちゃん、このクラスで気になる男子とかいないのかい?』

直樹が目をギラギラさせながらそんなことを聞く。少なくともお前はないな。って、しまった!

『じつはね、あたしも旦那がいるんだあ。婚約もしたのよ♪』

『『ええー!』!』!』

あゝ、やべえ、逃げよう・・・。

『だれなの？ 幼なじみとか？』

『ううん。圭佑だよ！一緒に住んでるの』

えっ……。そんな空気が教室を流れる。そして全クラスメートたちの視線は再び俺へ……。

『あ、あはは〜』

苦し紛れに。直樹を見ると……。あれ、無表情だ？

『圭佑、俺はずっとお前のことを親友だと思っていた。だが、仲間に黙って美少女とあーんなことやこーんなことをするやつは友達でもなんでもないんだ。ただの裏切り者、つまりは敵だ』

『ま、まて直樹、誰もあーんな（ry）をしたなんて言ってないぞ。それにがつついてたお前が人のことを言える——』

『問答無用だ！！野郎ども！やっちまうぞ！！』

オオオー！と声が上がると同時に俺は教室を飛び出す。この、とばかりにちらっと実央を見ると、満面の笑みでウィンクしていた――。

## 4、お昼寝

『やつは見つかったか？』

『いえ、こっちにはいません！』

『くそー、どこに隠れやがった・・・』

——ふう。なんとか見つからずにすんだがこれでは迂闊に出られないぞ・・・。

まったく、実央はえらいことしてくれたぜ。わざとだな、抜目ないやつめ。

次の授業まであと2分・・・。サボって屋上で休憩することにする。どうせ教室にも居場所なんて無いし。

『うはあゝゝ、解放されたぜー！』

学校の屋上で大の字に寝転がる。あと2時間くらいはのんびりできる。放課後はやつらが諦めて帰るまで隠れておこう。

『けーいーすーけっ！』

不意に声をかけられてうろたえる圭佑。しかし、すぐに安堵する。

『なんだ実央か……。お前もサボりか？俺が言うのもなんだが、授業でないとさっぱりわからなくなるぜ？』

『大丈夫だよ。あたしはちゃんと予習してるし。ていうか実は高校生の範囲はもう理解できてるから、出席日数が足りてれば問題ないんだよ♪』

『まじか?!お前頭いいんだなー』

『大好きな圭佑とのんびりできる時間が増えると思ったら軽いもん』

大好き、と面とむかって言われることに慣れていない圭佑は一瞬で赤面する。

『なんでだろうな、なんかお前のこと昔から知ってる気がする』

『あたしも。さっき聞かれたときは適当に答えたけど、実は圭佑のうちの前に立つまでの記憶がないの。わかるのは名前と、圭佑のことが好きだってことだけ。』

『不安なのか？』

『そうだね。いつのまにか知らない場所にいて、わけもわからず気持ちに従って動くだけでも。正しい保証なんてないし。でも、あたしが頼れるのは圭佑だけだし、信じてるから辛くはないよ』

『そっか。じゃあ俺がついてやるから、無くなった記憶を探そうぜ』

『フフ♪ありがと』

実央は最初から最後まで笑顔だけは保っていた。

『ふああ・・・、なんか眠くなってきちゃった。』

『寝るか？ まだまだ時間はたっぷりあるしな』

『うん。おやすみ』

実央はそれだけ言うと、3秒もたたずに眠りについてしまった。俺は実央の隣に寝転がり、きれいな寝顔を眺めていた。

## 5、お・ん・ぶ・♪

『う、さみい・・・』

何時間寝ていたんだろう？陽はもう沈みかけていて、学校に生徒は残っていない。

『・・・うそだろっ?!』

俺たちはいつのまにか抱き合うように眠っていた。というより、実央が抱き着いてきた感じがするぞ？

『うーん、下手に動けないな・・・。おい、実央？実央さーん？』

『すー・・・すー・・・』

あー、完全に熟睡してらっしゃいますねー。

とにかく身体が冷えないうちに家に帰らないと。風邪なんてひかれたら後が面倒だしな。

それにしてもいい匂いだ。女の子って皆こんな匂いをするのかな。

『つとと、いかんいかん』

俺は実央を背負って帰ることにした。同じ制服を着た子を背負って歩くなんてなかなか見ない光景だろうな。どこぞの制服カップルはよく手を繋いで歩いてるだろうが、これでは兄妹みたいだ。

『あー腹減ったなー。そういや昼飯食ってないな。実央、いつ起きるんだ？ 晩飯作ってほしいんだが』

『ふぁい?? あ、圭佑おはよー』

『あ、起きたか。あのままずーっと寝てたんだぜ』

『ありやりや。。。あたし一度寝るとなかなか起きられないの。ごめんね、あたしもう歩けるよ?』

『いや、いいって。このまま帰ろーぜ』

こんなかわいい子と密着してるんだ。こんな機会を手放すやつはいないだろう。今のうちに堪能しておくさ。

何よりこのフカフカな感触がたまらな――



『圭佑、なんか変なこと考えてない?』

『そ、そんなことは、な、ないぞ?』

『えー、ほんとお? 嘘ついたら晩ご飯作ってあげないぞお?』

『ごめんなさい、少し考えました』

『やっぱりね〜(笑) 圭佑は変態さんだから仕方ないけどね♪』

『ありがと・・・げふん。ちょ、誰が変態だよ!』

危ない、素がでるところだった。・・・え? もう知ってる? 大丈夫だ、それは人違いだよ、うん、きっと。それにしてもいい匂いだ。

そんなこんなで家に帰ってきたわけだ。晩飯はとてもおいしくいただきました。

『じゃ、俺風呂入ってくるわ』

『あたしもー』

『ぶっ! あたしもーじゃねえよ、一緒に入るつもりか?!』

『え? だめなの・・・? たしか本では”男は風呂でオトセ”って書いてたような』

『どんな本だよ!』

『男と仲良しになる本』

『内容がめちゃくちゃ怪しいじゃねえか』

『むう。あ、えっとたしか断られそうなときは・・・』

実央が急にもじもじします。そして上目遣いで――

『お風呂・・・一緒に入っちゃ・・・だめ・・・かなあ・・・?』

『ぐはっ?!』

アニメや漫画でしか見たことねえぞ、このシチュエーション! そんなことされたら断れねえ。

『本気なのか・・・?』

ここで”なに言ってるのそんなわけないじゃん、きゃーほんとに変態さんだー”なんて言われたら泣くぜ?

『本気だよ! あたし圭佑とお風呂入りたいもん』

本気のようにだ……。仕方ないな。

『ど、どうしてもって言うなら……。うちの風呂広いし』

『わーい！じゃあ用意してくるね！』

まったく、どうなっちまうんだ……。

## 6、お風呂？（前書き）

合宿で投稿が遅れました（汗）  
これからもぼちぼち書いていくと思います

## 6、お風呂？

『まったく、俺はあいつがさっぱりわからん』

湯舟に浸かりながら考える。

いきなり住み着いて、飯作って、お節介やきかと思えば、子供みた  
いないたずらしたり。

この際、ストレートに聞いたほうがいいかも知れない。

『圭佑〜入るよ〜♪』

『き、きた・・・ごくっ』

風呂場のドアが開き、そこには身体にタオルを巻いた実央・・・で  
はなかった。

『スク水？？』

高校で支給される水着だった。ちょっと期待しちゃったじゃねえか。

『タオルでくると思ったでしょ？』

『ギクッ。す、すまん・・・』

こいつ、帰り道といい今といい、どこまで鋭いんだ。

『お前、それじゃ身体洗えないんじゃないのか？』

『何気にしてるのよ、えっちゅ♪』

『ぼっ！別にそんなつもりで聞いたわけじゃ・・・！』

『アハハ♪かわいい』

『まったく・・・』

『また明日の朝入るから大丈夫よ』

『そっか』

『よし、じゃあ、あたしも！』

ざばああん

『・・・』

『・・・』

しばしの沈黙。これはすごく気まずい……。どうしようか？とりあえず当たり障りのない話題でもだすか。

『学校で友達できたか？』

『うん♪皆といろんなこと話したよ。でも男の子たちは下心まる見えだね（笑）』

『あいつらいつもそんなだからな。』

そこまで話したところで再び沈黙。もっと話広げろよ俺！

『あ……。あたし、ちょっとのぼせちゃったみたいだから……。先にでるね』

突然そう言うと言央はさっさと出て行ってしまった。  
まだ5分もたつてないのに？確かに実央の顔は真っ赤に染まっていたような気もするが。

やっぱりわからん。あいつの性格はちよくちよく変わるな。何と云うか、情緒不安定だな。

そういや、ここに来るまでの記憶がないとか言ってたが、それはどういうことなんだ？記憶がなくなるなんてただごとじゃないよな。

あいつ、家族はいないのかな。

何より、なんで俺のことを知ってたんだ？親戚とかではないし、俺とは接点が無いから好きになる理由はないはずだ。それとも俺が忘れてるのか？

『あー、もうさっぱりだ』

頭には疑問符しか現れなかった。何一つ納得できることがない。すつきりしねえな。

『俺も出るか・・・』

風呂から出るとまずは冷蔵庫へ直行する。風呂上がりには必ず牛乳を飲むんだ。じじくさいとか言わせない。

リビングに実央の姿はなかった。もう部屋で寝ているのか？

2階へ行き、自分の部屋のドアを開ける。すると、なんとベッドで実央が眠っていた。相変わらず寝顔が超絶かわいい。



『起こすのは悪いな。隣の部屋行くか』

まったく、実央は何をしでかすかわからん。やはり謎だらけである。

## 7、ずっと前

夜。

道端には少女がいる。

寒い。刺すような冷気だ。雪も降っている。3月の気温とは思えない。

そんな中、少女はどうみても部屋着姿で座り込んでいる。しかも、裸足のままだ。

俺は少女に声をかける。

『こんなところで何してるんだ？』

少女は顔を上げ、虚ろな瞳でこちらを見つめる。そこで初めて少女の顔をはっきりとみた。直感だが、ポニーテールが似合いそうだ。

少女の身体は小さく震え、凍えている。

『ほら、着ろよ』

俺は着ていた制服のジャケットを少女に着せた。

『え・・・』

『大丈夫、大丈夫。もう卒業したからそれ使わねーんだ。それにお前寒いだろう？』

少女はコクンと頷いた。

『お前、親とかどうした？家に帰らないのか？』

『・・・』

少女は小さく顔を横に振る。

『家出か？無理矢理うちに帰すのもかわいそうだし俺のうちにくるか？って言うても知らないやつから言われても怖いだけか・・・。じゃあさ、そのジャケットの中の学生証に住所も書いてるから、もし来たくなったらお前の意思で来いよ』

『・・・りがと』

かなり小さな声だったが、かろうじて聞こえた。俺にできることはここまでかな。

『じゃあな。ほんとに危ないからできれば家にかえるんだぞ』

『あなたのこと——！』

---

そこで目が覚めた。

## 8、涙

朝。

あの夢はなんだったんだ？たしか中学卒業直後のことだっけ。そしてあの少女は・・・あきらかに実央だった・・・。

実央が突然うちに来て、なぜ俺の名前を知っているのかは思い出した。だが、理由がわからない。

結局、実央はなぜあんなところに独りでいたのだろう。

そんなことを考えているうちに、俺は違和感に気づいた。俺が寝ていたベッドに実央が入って寝ていた。ベッドは小さいので、例の抱き着かれる形だ。

しかし、いつもの安らかな寝顔ではなかった。

『こいつ・・・泣いてるのか・・・？』

実央の顔には、あきらかに一晩中泣いていたであろう涙のあとが残っていた。

そういや、昨日風呂から出る直前少し様子がおかしかったな。

俺はこの子の過去になにがあったのかは知らないが、なぜ今さらここにきたんだ？それになぜ「嫁になる」なんだ？

『ん・・・おはよー圭佑』

『っ！』

考え事をしていたのですっかり不意をつかれてしまった。さっきのは・・・聞かないでおこう。

『おい、なんで俺のベッドに入ってるんだ』

『えー、だって寒かったんだもん！くっついて寝たら暖かいしね』

なんか毎回すぎて驚きも無くなってきたな。慣れって怖い。

『あれ?!もう8時じゃない!学校行かなきゃ!』

『あーほんとだ』

『のんきに言っていないで、ほら仕度して!』

結局今日も世話女房に急かされるハメになったのだった。詳しいことはまた今度聞か。

## 9、日常

『あれ〜？今日は夫婦で登校ですかあ〜？』

『おアツいねー！』

『ひゅーひゅー！』

時間ギリギリで教室に仲良く駆け込んだ俺達はクラスメートたちに冷やかされるのだった（俺は非リア充同盟から一斉に睨まれた）。

『ふーっ！セーフ！なんとか間に合ったね♪』

『あー、脚パンパンだぜ・・・』

俺が教室の扉を閉めて少しすると、再び扉が開いて担任教師が入ってくる。そこからは俺にとっては何も変わらない日常だ。実央がいる以外は。

授業中。

『あー・・・これわかんねーな。あとで実央に聞くか』



チラッと実央の方を見る。

ちなみに俺の席は窓際の一番後ろ。一般的な生徒の中で一番人気が高い席だ。

そして実央は俺の隣の列の一番前。板書をノートに写している。時折カクンと頭が落ちるということは、相当眠いのだろう。ポニーテールがゆらゆらと揺れる様子がなんとなくかわいい。

会って少ししか時間が経っていないのに、俺の中では実央がいて当たり前のような、そんな感覚になるときがある。幼なじみのようにお互いを認め合っている感覚。まあ、あいつが馴れ馴れし過ぎるものもあるだろうが。

そんなことを考えていると、授業の終わりを告げるチャイムが鳴る。

実央は『んーっ』と伸びをした後、こちらを振り向いてニツと俺に笑いかける。それに対し俺は少し笑みを見せて答える。ほんとに、笑顔は誰にも負けないくらいかわいいな。

次の授業が始まって5分もすると、実央は机に突っ伏して寝てしまっていた。

---

昼休みに入るとすぐに、直樹率いる非リア充同盟が俺の周りを取り囲んだ。

『な、なんだよ？』

また昨日のように宣戦布告されるのかと思ったが、直樹の口からは予想外の言葉が返ってきた。

『昨日はすまなかった。俺達もつい感情的になっていた。実央ちゃんに何故お前が好きなかを聞いたところ、落ち着いていて、余裕があるところだそうだ』

少なくとも実央からそんなことを聞いた覚えがないので、おそらくは適当なことを言ったのだろう。

『そのお言葉を聞いて俺達は悟ったんだ。むやみにリア充を憎む様は自らにとってはなんの意味もない、むしろマイナスであると。だからもうお前のことは敵視しない。俺達の愚行を許してくれ』

一斉に頭を下げる同盟メンバー。

『いいっていいって。気にすんなよ』

『ありがとう、わが親友よ！』

なんだこれは、どこの青春ストーリーだよ。

『圭佑、一緒にお昼食べよう』

『おう』

俺は囲まれていた輪を抜け出し、実央と合流した。

『どこで食べよっか？』

『屋上行くか。あそこが一番落ち着くぜ』

そう言って俺は実央の手を引いて階段を上っていった。

## 10、提案

あれ、なんで手つないでるんだ？

『よし、だれもないな』

『じゃあ食べよっか♪』

そう言って持ってきた鞆から二人分の弁当を取り出す。

『急いで作ったからあんまり味に自信ないけど・・・』

『実央が作ったもんなんなんでもおいしいよ』

『フフ・・・ありがとう』

恥ずかしい・・・のに、なんで俺はこんな台詞を恥ずかしげもなく言っているんだ？

おかしい、なにかがおかしい。頭ではわかっているのに言動が変わろうとしない。

でも、まあいいか。今の間はこうしておこう。

昼飯が終わり教室に帰ると、何やらクラスメートたちが話し合いをしている最中だった。

『あつ、実央ちゃん！圭佑くん！二人もこっち来なよ！』

『なにやってんだ？』

どうやら一ヶ月後の文化祭にクラスでなにをするかを決めていたようだ。いいネタがでずに困っていたらしい。

『べつに適当でいいんじゃないのか？焼きそばとかさ』

『いやよ、そんなの！ありきたりじゃない』

パンツと机を叩き、学級委員の早百合が強い口調で言う。どうやら、どこともカブらない独創的で突飛なことがしたいらしい。早百合は極度の目立ちたがりで、見る人を感嘆させないと気がすまないのだ。

『つたく……。んで、今何が拳がってるんだよ？』

『“普通”の出店に“普通”のアトラクション、それに“ごく普通”の……』

『はいはいわかった。要は今でてないやつをだしていけばいいんだろ?』

と言っても、俺と実央がいない間に大半の奴がネタを出し、その全てを早百合に却下されているようだ。これ以上はでないような気がする。

『実央ちゃんは何かやりたいことあるの?』

『あたし? そうだなあ・・・演劇とかやりたいな』

『『演劇?』?』

そういえばうちの学校は教室、校庭、運動場はよく使うが、進んで体育館で何か発表しようというアクティブなやつは見たことがない。早百合はやりそうだが、多分反対されてきた口だろうな。しかし、転校したてで人気の高い実央が言うのならば話は別らしい。

『いいな、演劇!』

『やろうやろう!』

クラスが盛り上がる中で一番テンションが高かったのは、やはり早百合だった。

『ありがとう実央ちゃん!! さすが私が見込んだだけはあるわね! なら、私は大衆受けしそうな作品を探してくるわ!』

そこで素朴な疑問が一つ。

『でも、前例がないんだろ? 体育館って使っているのか?』

『フツ、私をナメないでちょうだい。私は全ての校則を把握しているわ。その中に体育館の使用規制などないのよ!』

早百合が自慢げにオーバークションで言う。

『ということで皆、演劇でいいわね? 何か意見や提案があれば私にメールするのよ』

皆の意見が一致したところで、ちょうど昼休みの終わりを告げるチャイムが鳴った。

## 11、友達

何事もなくつまらない授業も終わり、クラスメートたちは各々部活に行くなり友達と帰るなりしていた。今からカラオケに行こうなどと言うものもいた（ただこいつらは毎日カラオケに行っている気がするが）。

『圭佑く帰ろっか』

『そうだな、することもなしさっさと帰って晩飯までくつろぐか』

俺達は所属している部活もないし、今からどこかに行くのも疲れるので授業が終わったらすぐに帰る。

『なあ実央、おまえ部活とかする気はないのか？』

『んゝ。別にいいなって思える部活もないしなあ。趣味もないし、何より圭佑といっしょにいられる時間が減るのはやだもん！』

恥ずかしげもなくそんなことを言う実央。こいつは絶対尽くすタイプだな。てか俺尽くされまくってるよな。

『おまえ友達いないのか？』



『友達・・・いたかな・・・？覚えてないや』

そっか、こいつ記憶がないんだっけ。

『これから作るつもりもない？』

『あたしからはね・・・。同級生なら大丈夫なんだけど、友達ってなるとなんだか怖くて・・・』

『そうか……。まっ、友達なんて勝手にできるさ』

『うん、ありがと・・・♪』

実央が俺の手をとって歩く。

あまり気が利くことが言えたとは思えないが少しは元気づけられただろうか。とにかく、実央には俺以外にも頼れる人を作ってもらいたい。そのためならなんでもするさ。

「ぐう」

『ひゃあっ？』

不意に実央の腹が鳴る。

『えへへ、考えてるとお腹空いてきちゃった』

『ははっ、んじゃ、帰ったらすぐ飯食うか。今日は俺が作るよ』

こう見えて料理くらいはできるんだ、一人暮らしだったからな。

『ほんと?! 楽しみだな〜♪』

夜。

寢床で一人考える。

このまま、日常が続いて欲しいと思う。実央はそう思っているんだろうか？

実央は昔の記憶を取り戻したいと思っているんだろうか？

記憶を取り戻したらどうなってしまうのか。答えのない疑問を繰り返すうちに、深い眠りに落ちていくのだった。

## 12、実央

あたし、誰なんだろう。

どこにいたんだろう。

何をしたらいいんだろう。

思い出せない・・・わからないよ・・・。

圭佑って、誰なんだろう。

圭佑は、あたしのこと迷惑に思ってるのかな？

あたし、ここにいてもいいのかな？

でも、ここ以外に行くアテなんてないし・・・。

最近、変な夢を見る。

毎日、同じ夢。

夢の中のあたし、一体なにしてるんだろう。

知らない男の子が話し掛けてくる。顔が思い出せない。

でも・・・安心する。

圭佑・・・

### 13、演劇どうなる？

『「ロミオとジュリエット」よ！』

『・・・えらく王道だな。でも大衆受けを狙うならそのくらいがちょうどいいか』

昨日の昼休みに学園祭で演劇をすると決まって、早百合は監督を務めることにしたようだ。

「ロミオとジュリエット」といえば、だれでも知っているであろう超有名な悲劇だったはずだ。このクラスに主役ができる器を持ったやつがいるのか？

『主演は圭佑くんの実央ちゃん決定ね』

『っえええ！？おれかよ！？？』

『だって仕方ないじゃない、うちのクラスにここまでラブラブなカップルはいないんだから』

早百合がニヤニヤしながらそんなことを言う。こいつ、絶対狙ってやってるだろ。しかしたまには目立つのもいいかもしれない。

『実央は？かまわないのか？』

『あたしは圭佑と一緒になんでもするよ!』

とゆーことでけってー。

『じゃあ今日から演技のレッスンを始めるわよ!放課後までに教室の使用許可をとってくるわ!』

『台本とかあるのか?おれあんまり話の内容しらないけど』

『ふっふっふ。あたしをだれだと思っているの?ちゃんと昨日のうちから徹夜で作ってきたわ!!』

ボツになったときはどうするつもりだったんだろう。まあこいつが自分の意見をボツにするわけないけどな。

渡された台本はそんなに分厚くなかったから主演でも頑張れば覚えられるだろう。問題は演技力だ。俺は経験ないし、実央もわからない。あまり高いクオリティは期待しないでほしいな。

『ああ、ロミオ!あなたは どうしてロミオなの?!』

『カット!いいわよ!実央ちゃんサイコーにイケてるわ!』

早百合は映画監督になったつもりで指揮っている。表舞台に立つより向いてるんじゃないか？どうせ監督として名前のるんだし。そのうち本当に映画作りそうだな。

しかし実央は演技がうまいな。自分ではなにもしやっていたみたいんだけど、実央の声を聞くだけで物語に入り込めるみたいだ。

『圭佑くんもあれくらいやってくれないと。ふふふ……一ヶ月後の文化祭が楽しみだわ!』

……忙しくなりそうだな。

帰り道。

頭をおさえてだるそうに隣を歩く実央。

『おい、実央？どうしかしたか?』

## 14、変わる日常

頭が、痛い――

あ、なんだろ、なにか・・・

――『おい、実央？どうしかしたか？』

『え？』

『頭痛いのか？』

『えと、うん、ちょっと痛いかな・・・』

『なら早く帰って寝た方がいいな。練習に影響したら早百合に悪いしな。歩けるか？』

『ちょっとフラフラするかも』

『よし、おんぶしてってやろう。のれよ』

実央が俺の背中に体重を預ける。

実央は耳元で喋りかける。

『前にも圭佑におんぶされて帰ったことあるよね』



『そうだな。前はほとんど寝てたけどな』

『エヘヘ・・・圭佑の背中であったかいから・・・すぐ眠たくなるよ。家まで、いいかなあ？』

『ああ、ゆっくりしてろ』

しばらくすると実央は寝息をたてていた。どうも最近、実央に元気がない気がする。俺の家に来た直後はもっとハキハキしていたはずだ。

ただ体調が悪いだけなのだが・・・。

あれから一ヶ月弱が過ぎ、文化祭の前日になった。  
実央は日ごとに元氣を取り戻し、笑顔を頻繁に見せるようになった。  
やっぱり俺の気のせいだったかな。

早百合や他のクラスメートたちともすっかり仲良くなり、もう転校生として見られることはなかった。

実央が俺達の日常となったという実感がはつきりとある。

『実央』

『んーなあに？圭佑』

『いや、呼んでみただけ』

俺もどんどんおかしくなっているが・・・。

『圭佑』

『ん、なんだ実央』

『あのさ・・・』

『？』

『エヘッ♪呼んでみただけ』

なんだこいつ、惚気か。え、人のこと言えない？ほっとけよ。

俺は可愛い嫁の頭をわしゃわしゃする。行動に特に意味はない。やりたかっただけだ。嫁が可愛くてなにが悪い。

このままでは読者の怒りが聞こえてきそうだ。そろそろ本編に戻らないとな。反省。

『さあみんな、明日はついに私たちの晴れ舞台よ！各自イメージトレーニングを最低3回はしておきなさいよ。じゃ、解散』

前日の練習を終え、早百合が声を張り上げる。思えば苦しい1ヶ月だった。台詞を覚えるのにかなりてこずったせいであまりスムーズにはいかなかったからな。

今日のリハーサルはなかなかの出来だと思うぞ。いやあ俺も進化してるね♪

『圭佑、帰ってごはん食べよ！』

『あ、帰りスーパーよるぞ。食材がない』

『じゃあプリン買って！（キラキラ）』

うつそんなキラキラした目で見られるとにやけるじゃねえか。実央がおねだりを覚えて困るぜ。まあ可愛いから許すけど。

『しゃーねえな、一個だけだぞ』

『やったあ♪』

やべえ、嫁可愛すぎ萌える。

## 15、実央の笑顔

文化祭当日。

実央はめずらしく緊張しているようだった。楽屋内で立ったり座ったりと落ち着かない様子だ。

『あー、どうしよう・・・どうしよう』

あ、独り言まで始まった。

『実央。ちょいちょい』

『? なぁに?』

『深呼吸～～スーハー』

『すう～はあ～』

『落ち着いたか?』

実央の頭をなでてやる。さっきとは違うまったりした表情で、『ふにゃあ』などと言っている。

『お前は猫か。それより、もうそろそろスタンバイの時間だろ?』

『わ、わ、ほんとだ! 着替えなきゃ。じゃあまたね、圭佑!』

実央はいつものポニーテールを揺らしながら部屋を出て行った。舞台では髪下ろすんだよね。ポニーテール好きにとっては少し残念でもある。

『さてと、俺も着替えるか』

舞台上でのことはあまり覚えていない。

ただ、観客は実央の迫真の演技に圧倒されていた。正直、俺も見とれてしまって台詞がいくつか飛んでしまい、下手なアドリブでカバーした。

芝居が終わっても拍手がなりやむことはなく、急遽カーテンコールもした。

俺たちの作った演劇は最高のできだった。

『お、すごい量の差し入れだな』

楽屋にもどると袋いっぱい詰められた差し入れがたくさんあった。

『わー！すごいすごい！だれがこんなにくれたんだろ？』

『クラスの仲間や見てた人たちの気持ちだよ。実央のこと見てくれた人がこんなにいたんだな』

実央は袋の中からみつけたプリンを見て満面の笑みを浮かべていた。

俺はこの笑顔が見たかった。心から喜ぶ実央の笑顔。昔の記憶がなくなたって、今が楽しければ満たされるはずだ。思い出はこれから作ればいい。

『・・・で、俺はないのか？』

『・・・そうみたいだね（笑）』

おいおい、クラスメートからもきてないのか。俺忘れられてるのかな・・・。

『よし！今夜は――『実央ちゃーん！！』』

不意に早百合が乱入。このやろー俺の台詞に重ねやがったな。

『実央ちゃん！これから打ち上げいくわよ！今回の主役は実央ちゃんだから絶対よ』

そう言って実央”だけ”を引っ張って行ってしまった。一人残された俺……。

……やっぱり俺忘れられてるな。

俺は早百合たちを追って打ち上げに行くことにした。



## 16、打ち上げ、そして――

打ち上げ会場は近所のファミレスだった。

幹事などは特にいなく、ただ食べて喋るだけ。まあ高校生ならこんなものだろうな。

クラス全員で来ているため、店内はほとんど制服の男女で埋まっている。皆、各々の話題で盛り上がっているようだ。

最後に来た俺達は3人で空いている席についている。

『実央ちゃん、今日の演技はリハなんかよりずっとよかったよ！あたし最後のシーンで感動して泣いちゃってさあ、ほとんど前が見えなくなっただんだ（笑）』

早百合監督は実央をベタ褒めだ。実央もまんざらでもないらしく、嬉しそうにピヨピヨンと上体を揺らしている。

『エヘヘ。／＼／＼でもあたし、圭佑が一緒じゃなかったらこんなできなかったから、半分は圭佑のおかげだよ♪』

『お、やっと褒められたぜ。忘れられてると思った』

早百合がすかさずボケる。

『んーでもあたしがギャラを振り分けるとしたら”実央ちゃん…圭佑”で”9…1”ってとこかな』

『少ねえっ！！完全にロミオがジュリエットの尻にしかれてるよ！』

こんなふがない俺が演じてしまつてすまないな、ロミオ・・・。

---

そんなこんなで打ち上げは終わり、皆で大きめの公園に來た。適当に写真でも撮ろうということらしい。そこで、早百合が声を張り上げる。

『さあ皆！お待ちかねの主演の2人よ！存分に撮ってあげなさいな！』

一瞬のうちにデジカメやケータイカメラの音が鳴り出す。

『おい、なんかやってくれよー！』

『立ったままじゃつまんないよー！』

後ずさる俺達はだんだんと壁に追い詰められる。そこで俺は覚悟を決めた。いや、この異様な空気に負けたのかもしれない。

『え、え？圭佑っ?!』

俺は一瞬屈み込み、実央の脚をすくいあげて背中を支えた。いわゆる「お姫様だっこ」だ。

『きゃー!』

『いいぞー!それでこそ男だあ!』

『うらやましいぞ圭佑エー!』

あちこちで黄色い歓声が沸き上がる。  
早百合も、

『いい、すごくいいわ!』

などと喚いて数十枚もの写真を撮りまくっている。

だいぶシャッター音が弱まったところで実央を下ろす。  
実央は顔を真っ赤にして俯いていた。

クラスメートたちは解散し、それぞれ二次会にいく人たちもいたが、俺と実央は家に帰ることにした。

『今日は楽しかったね♪』

『そうだな』

『今日はもう疲れたけど、明日は休みだし圭佑ともお疲れパーティーしたいな』

『よし、じゃあ明日は家でまったり菓子パでもするか！俺スーパー寄って色々買ってくるわ』

『じゃあ先帰って寝るね』

そう言って別れた。

スーパーからの帰り道。夜道にケータイの着信音が鳴り響く。

『おう、早百合か。どうした？』

『圭佑、落ち着いて聞きなさい。・・・実央ちゃんが・・・人を刺

したらしいわ』

あまりに予想外の出来事に、俺は何も言葉が出なかった――。

17、・・・！

『くそっ、実央・・・どこにいるんだ・・・！』

スーパーからの帰り道、早百合からの電話の内容に呆然としていた俺は何も考えられなかった。

『ついさっき実央ちゃんから電話が来て、「人を刺しちゃった、どうしよう」って・・・。「圭佑には言わないで」とも言ってたわ。場所を聞いたら切れちゃって・・・』

『俺に言うなって？』

『うん。でもやっぱり知らせた方がいいと思ったの・・・。とにかく、クラスの皆に呼びかけて探してもらおうわ』

『スマン・・・俺も探してみる』

電話を切り、すぐに走り出す。なんで実央を一人で帰したりしたんだ、俺は・・・！

しかしなぜ実央が人を刺したりするんだ？もう何がなんだか、わけがわからない。

『くそっ、実央・・・どこにいるんだ・・・!』

そうつぶやいて道を曲がったとき、人の群れと、道路の端でうずくまって震えるポニーテールの少女をみつけた。

『実央?!』

『・・・圭佑・・・?』

『早百合から聞いたぞ、なにがあったんだ?』

『早百合ちゃん・・・言っちゃったんだ』

『いいから教えろ!なにがあった?!』

実央は自分の手を見つめながら、弱々しく消え入りそうな声で言った。

『どうしよう圭佑・・・あたし、殺しちゃったかもしれない・・・!』

実央の服や手はおびただしい量の血で汚れていた。周りを見渡すと、人だかりの隙間から、腹にナイフが刺さり倒れている男が見えた。救急車は野次馬の誰かがすでに読んだみたいだ。

『お前が・・・やったのか?』

実央は膝に顔を埋めて話す。

『いきなり・・・あ、あいつが・・・ナイフ持って・・・襲ってき  
て・・・連れてかれそうになって・・・抵抗したら・・・ナイフが・  
・あたし・・・怖くて・・・!』

それを聞いて俺は内心ホッとした。実央が自発的にやったんじゃないな  
いんだ。それなら実央は罪に問われることはないだろう。

『いいか、実央・・・今から警察に行って、お前が襲われて抵抗し  
たことを話そう。俺もついてるから。』

『・・・うん』

『立てるか?』

俺は実央の体を支えて歩きだす。その後すぐに救急車が来て、男は  
運ばれていった。



## 18、突然の

俺は警察の待合室のようなところで実央が帰ってくるのを待っていた。

早百合には『見つけたから心配するな』と連絡を入れておいた。向こうも察してくれたようで、あまり深くは聞いてこなかった。

『実央・・・大丈夫だろうな・・・』

俺は一人イラついていた。まだ状況が整理できないこともあったが、何より実央が俺に知らせようとしなかったことに腹を立てていた。

しばらくすると、扉が開いて実央が入ってきた。刑事が言うには、どうやら実央を襲った男は指名手配中の通り魔だったらしい。ナイフにそいつの指紋がべったり付いていたこともあり、実央の疑いは晴れ、起訴もされないそうだ。

『実央・・・』

『・・・』

実央は思い詰めた顔をして黙り込んでいた。

『実央、帰ろう』

そう言って手をとろうとしたとき。

「パシン！」

『おいっ・・・？』

俺の手を振り払って実央はこう言った。

『あたしに構わないで。・・・さよなら』

『おいっ、実央！？』

『ついて来ないで！！』

実央は走り去った。俺は何がなんだかわからず、立ち尽くしていた。

実央の瞳には、たしかに涙が溢れていた。

そして実央は俺の前から姿を消した。

## 19、喪失、悲しみ

実央がいなくなってもう一ヶ月。街はイルミネーションに包まれていて、今夜のクリスマスの準備は万端だ。

一ヶ月前、実央が走り去ったあと、俺はあれこれと思い巡らせながら家に帰った。

リビングのテーブルには、メモが置いてあった。そのメモには、

『ごめんなさい。圭佑には迷惑かけたくなかった。あたしのことはもう忘れて。』

と書いてあった。

その後一ヶ月間、実央は学校にも姿を見せず、家にも帰って来なかった。

俺はあてもなく冬の街を歩いていた。寒さでかじかんだ手が震える。

『ううゝさみいつ、コーヒーでも買って飲むか』

近くの自販機で暖かいコーヒーを買い、歩きながら飲む。一人で歩いているとどうも締まりがない。今までは実央がいたから……。

圭佑の頭の中は実央のことではいっぱいだった。街に流れるクリスマスソングなど気にならないほどに。煌めく電飾も暗く感じるほどに。

ふと、学生に評判のケーキ屋で足を止める。せっかくのクリスマスだしケーキくらい食べようか。

ショーウィンドーの中に並ぶケーキを眺めていると、甘いものが大好きだった実央を思い出す。

『実央の分も……、買って帰るかな』

結局、イチゴのショートケーキとチョコレイトケーキを一つずつ買って店をでた。

圭佑は家の近くまで帰って来ていた。

この近辺には二つの気配しかなかった。

一つは圭佑のもの、そしてもう一つは・・・。

## 20、暖かいホワイトクリスマス

実央だ。

あれは絶対に実央だ――。

家の前に佇む人影はインターホンを押そうか迷っているようだった。

なにより、見慣れたポニーテールだった。

『実央！』

『！』

実央もこちらに気づいたようだ。

『戻ってきてたのか。ほら、ケーキ買ってきたんだ、中で食べようぜ』

懸命にいつものように振る舞う。しかし実央は、

『やっぱりダメだよ・・・』

俯いてそんなことを言う。

『・・・』

沈黙。今までの二人にはなかったもの。しかしそれはすぐに破られた。

『・・・実央、俺はお前が帰ってきてくれただけで十分なんだ。正直言ってお前がいなかった一ヶ月間は辛かった』

『でもあたし・・・あんなことしちゃって・・・手もいっぱい汚れて・・・いくら罪にならなくたって人をきずつけたから・・・。そんなあたしといったら圭佑まで変な目で見られちゃうよ・・・』

やはり実央は、事故とはいえ、人を刺してしまったという行為に少なからずショックを受けていたようだ。  
だが、俺にはそんなことは関係ない。

『じゃあなんでここにいます？なんのためにここに帰って来たんだ？』

『っ！それは・・・』



『俺のことなんて気にするな。とにかく、俺にはお前が必要なんだ、だからさよならとかダメだとか言うな!』

『でもっ・・・でもやっぱりあたしは圭佑に相応しくない・・・!』

実央はそこで初めて顔を上げた。俺の目を見てくれた。それがきっかけで俺は勢いに任せて言葉を放っていた。

『あゝもう! 分からず屋だな!! いいか?! 俺はお前がいないと寂しいんだよ! 寂しすぎて死にそうだ! だからどこにも行かないでくれよ!! お前がどれだけ俺のことを考えてようが知ったこっちゃないんだ! 誰が何と言おうが、実央は俺の嫁だ!!! 文句あつか?』

あまりの剣幕に実央は口をポカンと開けている。そして――

『ぷっ! あはははは!』

笑った。実央は笑っていた。一ヶ月待ち望んだ実央の笑顔だった。

『フフ・・・圭佑、子供みたいだよ♪』

『・・・うっせえ、お前のせいだ』

実央は俺に体重を預け、俺は実央をそっと抱き寄せる。実央がそつとささやく。

『ありがとね・・・圭佑』

『俺はなんにもしてねーよ。ただわがまま言ったただけだろ？』

『へへへ♪・・・ね、圭佑？』

『どうした？』

『あたし、圭佑のお嫁さんになれてホントによかった。大好きだよ』

『俺も、実央が俺の嫁ですっげーうれしい』

しばらく抱き合っていると――

『・・・あっ！雪だ・・・！』

突然、天気予報にはなかった雪が降りだした。ホワイトクリスマスだ。まるで俺と実央を祝福しているようだった。

『寒いね……。でも、やっぱり圭佑ってあったかい……。』

俺たちは沈黙し、見つめ合う。先程の沈黙とは少し意味が違う。

実央は、口の形だけで再び『ありがとう』と言った。

雪の中抱き合う俺達は、どちらともなく、吸い寄せられるように互いの唇を重ね合った。

実央の唇は、冷たかったけど、涙のような悲しい味ではなく、なんだか幸せな味がした。

俺達の、初めてのキスだった――。

## 21、ほのぼの

——冬休みの朝。

『・・・起きられない・・・』

俺の身体には嫁がしがみついていた。

---

リビングにいる俺と実央は互いに目を合わさないようにしていた。

正直、めっちゃくちゃ照れる。

今になって考えると、俺達は恋人らしいことをしていなかったな。

それが昨日、急にあんなことになったんだ。少しくらい恥ずかしがってもいいだろう？

『実央、あのさ・・・!』

『あの、圭佑・・・!』

二人の声が重なる。そして再び沈黙。これは居づらい……。

しばらくあと、実央が先に口を開いた。

『圭佑……、朝ごはん、食べよっか？』

『お、おう、食べるか』

今まで見たことのなかった、実央のあからさまに恥じらう顔。

(か……かわいすぎる……)

これが自分の嫁なんだと思うと嬉しさで叫びたくなる。いまからここは世界の中心だ。まあ、叫ぶだけの度胸ないけどな。

俺はキッチンに立つ実央の後ろ姿を眺める。ポニーテールが機嫌よく揺れる。

俺の鎮静剤になりそうなくらいほのぼのな空気だ。

『圭佑、できたよ♪』

実央が手際よくテーブルに皿を並べる。ホントにこいつは家事をや

らせたら一人前だな。なんでもできるし。

『じゃあ、いただきます!』

『いただきます』

『あつ圭佑・・・!だめだよ・・・』

俺達はリビングにて実央が俺に寄り添う形で並んで座ってほのぼのとテレビを見ていた。

実央が少し動くたびに俺の中の何かが刺激される。ムズムズする。ヤバい。そして、我慢できなかった。

実央が立ち上がろうとした拍子に俺の中のムズムズが爆発した。俺は実央に腕を伸ばし――

むきゅ。

『ひゃあん!あつ、圭佑、だめだよお、髪が乱れるう』

ポニーテールをわしづかみにした。

『やあん圭佑！離してよ！』

『やだね♪』

そのまま実央を引き寄せて脚の間に座らせる。ハグするような形だが、依然として俺の手はポニーテールを握っていた。

実央が後ろを振り向く。

『んもお。いきなりどうしたの？』

『チクチクするからいじりたくなっただけだよ』

『もっと優しくしてよ』

そして、

『……てつきり抱きしめてくれるのかと思ったのになあ』

実央がぽつりとつぶやく。

『・・・？なんか言ったか？』

『べ、べつに！』

実央は赤面して前を向いてしまった。俺はまたポニーテールの手触りを堪能することにした。



## 22、久しぶりの

『ん・・・ふああ。あー、寝ちゃってたのか』

時計を見たら、30分ほどしか経っていなかった。そして、嫁は俺の上で寝息をたてて眠っていた。

『すー・・・すー・・・』

俺に抱き着く体勢で。

こいつは寝相が悪いのか？朝も似たような状況だったよな。まあいいけどさ。慣れちゃったし、悪い気もしないしな。

「ぴんぽーん」

実央の頭をなでなでほっこりデレデレニヤニヤとしていると、玄関の呼び鈴がなった。俺はそっと実央の拘束から抜け出して玄関に向かった。

扉を開けると、そこには早百合と直樹がいた。

『元気？』

『ういーっす!』

俺は扉を閉めた。

どうしようか、一応来るとは思ってたよ、”早百合は”。実央が見つかつたとメールを入れといたからな。でも直樹が来るなんて予想外だ。このままではほのぼの空気を乱されかねない。まあ早百合だけでもそんなに変わらないが。

あつ、忘れてしまっているであろう読者のためにもう一度紹介しよう。直樹とは俺のクラスメートで、かつては俺も所属していた「非リア充同盟」のリーダー的存在だ。存在感がなさすぎて作者にも忘れられていたようだ。

(ねえ、これってあたしたち試されてんの?)

(さあ……。あいつがそんなコメディなことするとは思えないぞ・・・? 今まで一番の親友をしてきた俺にもわからん)

外で二人がいろいろ相談しているようだ。ちなみに俺は直樹のことを一番の親友だと思ったことはない。

まあとりあえず入れてやるか。俺は扉を開けて二人を招き入れる。

『『おじゃまします』』

『そのリビングで適当にくつろいでくれ。・・・っ、しまった！』

実央が熟睡してたんだっ！だが時既に遅く、リビングに入った二人に発見されてしまった。

『・・・なかなか見せつけてくれるじゃない。圭佑、あんたさつきまで実央ちゃんと何してたのよ！！』

『いや、ただ寝てただけだって！なんもしてねえよ！』

やったといえはやったんだけどな・・・頭なでたり。

『ふあああ・・・あれ？早百合だ。どうしたの？』

周りで騒いでいたせいで実央が起きてしまった。実央は寝ぼけ眼をこすって早百合たちの存在に気づく。

『どうしたのって、あんたに会いに来たに決まってるじゃないの！まったくもう、人に心配かけという・・・』

『あゝそっか、えへへ忘れてたあ』

なんかこいつ脳天気になってないか？まあそんなところもかわいいけどな。何てったって嫁だし。あ、そういえば――

『そういえばさ、直樹はなんでここにいるんだ？早百合と直樹なんて一番ありえないコンビだし』

『え、そうか？ま、まあ気にすんなって』

妙にオドオドと話す直樹。なにやら早百合とアイコンタクトしている。めんどくせえな、ぶっちゃけさせるか。

『なに、お前ら付き合ってるの？』

『『えっ』』

『ギクッ』という擬音語が聞こえてきそうなわかりやすいリアクションをとる二人。やっぱりそうだったか。組み合わせがありえなさすぎるだろ。

『どういう馴れ初めなワケ？どう見ても俺の目にはただ事に見えないのだが』

『いや、まあ・・・！いろいろあったんだよ！なっ』

『そ、そうよ！それにさ、圭佑と実央ちゃんの方が意味わかんないし』

う・・・痛いところを・・・。

『で、お前らいつまでここにいる気？』

『『年越してもしばらくいるつもりだけど』』

何か不吉な言葉を聞いた気がした。

## 23、お泊り会?!

『お前ら、ここに泊まるつもりか?!』

『『そのつもりだけど、なんか問題?』』

『いやいや、問題だらけだって。だいたいなんでうちなんだ。』

普通、いきなり来て2人も泊めろなんて言わないぜ? しかもカップルで。まあ早百合には実央の件で心配かけたから結局承諾せざるを得ないわけだがな・・・。

『ねえねえ、何しにきたの?』

目が覚めてきた実央が問う。それに早百合が答える。

『ん? そりゃあこの時期は忘年会だよ! んでついでに新年会までやろうってわけ♪』

『『忘年会?!』』

実央と俺は目をまるくして聞き直した。

『そっ！だから泊まり込み！まあまあ、ここは何にも考えずにパ  
ツと騒いじゃお♪』

『すごい！ありがと早百合ちゃん！！』

『おいおいおい』

盛り上がっているところで申し訳なかったが重要なことなので割り  
込むことにした。

『ちよつとまでよ？たしかにうちは広いし部屋も布団も余ってる。  
でもまだ26日だぜ？さすがに1週間弱もつだけの食料はないし、  
金もそんなに余ってねえんだ。うちは親からの仕送りだから貯金も  
ないしな』

『えー、なんだよ使えねえー』

『全く、期待ハズレね。もっともてなしてくれるかと思ったのに。  
——なんてね、ウソウソ！ちゃんと自分の食費くらいはだすわよ』

とりあえずそれなら一安心だな。

『はあ・・・おっけ、わかったよ』

---

俺と実央は近所のスーパーに食料の買い出しにきていた。早百合いわく、人が集まったらとりあえず鍋らしい。だから、鍋の材料の買い出し。

実央がへんなものに挑戦したがるのをなだめながら買い物をする（ちなみに一番「無い」と思ったのは牡蠣フライだった。冷凍牡蠣は買うことにした）。

『よし、こんなもんだろ。会計済ませてさっさと帰るか』

『うんっ』

スーパーをでて帰路につく。左隣りに実央がいて、右手にはレジ袋。

『ね・・・、手、つなぐ・・・？』

『あ、・・・おう』

ぎこちない手つきでお互いの手を取り指を絡ませる。

やべえ、手に汗かいてきた。

実央っていつもは何考えてるかわからないのに、二人きりになった



とたんに乙女になるんだよな……。恥じらう姿が愛しくてたまらない。

自分の心臓の鼓動が聞こえそうなくらい心拍数が高いのがわかる。実央も、呼吸が目に見えて多いから多分同じなんだろうな。

そうして、結局は会話無しで家まで歩いたのだった。近所のスーパーに行ったのだからすぐについてしまうのだ。

玄関の扉を開けて中に入り、お互いの手は離れてしまう。もっと繋いでいたかったんだけど。

『あ、おかえり〜』

と、鍋の準備をしていた早百合が迎えた。

---

鍋パーティ。まあこいつら二人はしばらくうちに居座るからさほど大きなイベントでもない。普通に食べて、高校生らしく騒いで、平和に終わった。

問題はそこからだ。

誰か（おそらく直樹だろう）がどこからともなく持ってきたいろんな酒のせいで、皆のテンションは上がる一方だった。そして早百合がとんでもない言葉を放った。

『ねえ〜実央ちゃん〜ん、圭佑とはいつやっちゃうのお〜？』

『えっ・・・やるって・・・？』

『そんなの〜、えっ〜——』

『こらあ！俺の嫁に変なこと吹き込むんじゃないやねえよ！！』

あぶねえ、間一髪、危険単語は言わせなくてすんだぜ。

『やらないんなら俺が貰っちゃうぞ〜』

『『何言ってんだてめえは！！！！』』

早百合以上にとんでもなことを言った直樹に、俺と早百合の裏拳が前後から挟み撃ちにする！強烈なダブルツッコミを食らった直樹は酒の影響もあり、伸びてしまった。

『まったく、直樹にはいつものお仕置きを2倍にしてやらなきゃ』

あれ、なんか変な単語が聞こえたな？早百合の本音でこいつらの馴れ初めが見えた気がする。

しばらく吞んでいたら、早百合も力尽き大の字で寝てしまい、起きてるのは俺と実央だけ。それにしても早百合がはしたない、こいつたしか学級委員だったよな？こんなでいいのか？

『ね、圭佑』

不意に実央に呼ばれた。

『さっき早百合が言ったこと・・・』

俺は心臓が再び高鳴るのを感じた。

24、え？まじかっ!？

『さっき早百合が言ってたこと・・・』

そう言って近寄ってくる実央。俺の頭のなかでは心臓の鼓動が爆発しそうなくらい鳴り響く。

『実・・・央・・・』

『・・・ねえ・・・し・・・ちゃ・・・う・・・?』

突然の誘惑に戸惑うものの、健全な男子である俺には理性なんてものはなかった。ついには実央と密着し、抱きしめる。

『実央、俺・・・』

『・・・』

実央は俺に体重を預け――

『・・・実央?』

『・・・すー、すー』

——眠りに落ちた。

『寝たんかいっ!!!』

とツッコミを入れたがだれも反応なんてしてくれない。みんな酒で（一人は違うが）グロッキーだったから。何だろうこの虚無感。

『あうん・・・ふにゃあ』

そ、それ以上はだめだ！糸が、理性の糸が！くそう、寝言可愛すぎるぞ、反則級だ！

ついでにしがみつかれてしまい、動けなくなってしまった。まあ時間も時間だし、もうこのまま寝ても構わないかな。

俺は実央の頭をなでなでして瞼を閉じた。

朝・・・ではなく昼。

もはや昼である。起きたのが昼。最初に俺が起きて、その後に実央、早百合、直樹の順に起きた。直樹が起きた頃にはもう昼の1時を回っていたのだ。

『くっそ・・・二日酔いだー。頭いてー』

直樹がぼやく。実央や早百合にも多少の症状がでているようだ。でも俺は何ともない。酒に強いみたいだな、昨日も最後まで起きてたし。

各自で昼飯を食べ終えた後、今日（といってもあと半日）の予定について話す。

『俺らは別に何するとか考えずに来たからなあ。適当にどっか遊び歩くか、ここでもいろんなするかってとこだな！』

『そうね。圭佑、どっか行くとこない？』

なんだこいつらは。主催者じゃねえのか。と問うと、

『だってここ圭佑ん家じゃん。圭佑が主催でいいじゃない』

とのことですが・・・。いつの間にか俺が主催者か。まあそんな大層

なもんじゃないし、いいけどな。

それより、どっか行くとこか。この近くだったらやっぱりあそこか。

---

『わぁー！圭佑見て見て、これかわいいよ！』

実央が目を輝かせてはしゃいでいる。俺は実央に手を引かれ、電子音で騒がしい店内を歩き回っていた。

ここはゲームセンター。今思えば、実央と出歩くことはあまりなかったし、デートもほとんどしなかったから、いい機会だな。俺の長年培ったゲーム技術を見せるときがついきたか。

今日の腕は冴えていた。クレインゲームではぬいぐるみを2つ同時に取ったりと、好調だ。それもこれも全て、

むきゅ。

『やぁん！またぁー！』

実央のポニーテールをもつきゅもきゅにしているからである。もきゅもきゅしてると何故だか命中率が格段に高くなる。

もきゅもきゅもきゅもきゅもきゅもきゅ

はあ~~~~。いやされる。

『ふにゅ~~~~。』

なんか実央が諦めてきている気がするけどとにかくこの感覚がたまらない。もきゅもきゅ最高。ある意味中毒だな。

しばらくもきゅもきゅを堪能したあとはゲーセンをでて適当にブラ歩く。ちなみにゲーセンでしたことは、袋いっぱいぬいぐるみをとったことと、もきゅもきゅのみである。

『圭佑、どっか行くあてでもあるのか？』

『いや、ない』

直樹の問いはほとんど興味ないから反射的にスルーの方向で。

てか、ここから何したかまじで覚えてねえ。もきゅもきゅしか頭になかった。実央が可愛すぎるのがいけないんだ！というわけでこの話は終わり！もきゅ！



『ふにゃあ！』

## 25、直樹と早百合

家に帰ってからはやることもなく、ただのんびりするだけだった。ひたすらくつろぐ。俺はポニーテールをもきゅもきゅ。

実央をハグするように座る。俺は壁にもたれ、実央は俺に身体を預けて安定している。この体制になると実央はすぐに眠ってしまうようだ。まるで猫のように丸くなって寝ている。

『いいわねー、実央ちゃんは安定の旦那様がいて』

早百合が皮肉っぽく言う。直樹はだらしないから、とでも言いたそうだったが当の本人は既に爆睡中だ。ほんとにこいつらはどういう経緯で関係を持ったのかさっぱりわからない。

『あたしと直樹のこと？』

さっき思ったことは全て声にてでましたとき。せっかくだから聞いちゃおう。

『なんで、ってねえ……。実央ちゃんがいなくなったときにさ、あいつ、人一倍必死になって捜してたんだ。どうせ下心あったのにとだと思って話しかけたら、「圭佑が落ち込んでるなんてありえな

い、あいつはあんなんじゃないだ」って』

いつも男勝りな性格の早百合が乙女のように話すのは変な感じがするな。

『直樹ってけっこう友達思いなんだ、って見直しちゃったんだよね。それで一緒に行動するようになって、そしたらなんだか意識しちゃって、こいつのこういうトコ好きだな、って』

それで告っちゃった。そう言ったとき早百合は真っ赤になって俯いていた。

しかし直樹がそんなにイイヤツだったなんてな。気づかなかったぜ。俺も見直してやろうかな、と思ったら。

『んゝ・・・実央ちゃん・・・ぐへへ』

『『!?!』』

直樹が信じられない寝言を発した。

『このっ! 浮気もんが!!』

『てめえっ、人の嫁に何してんだよ!!』

『ぐはっ?!』

俺と早百合から渾身の一撃をもらうことになった直樹は必死に弁明していた。

『別になんにもねえって・・・実央ちゃんとの妄想なんて見てねえよお』

『じゃあさっきの寝言はなんだったのよ』

早百合はケダモノでも見るような目で直樹を見下ろす。うん、やっぱりこっちのほうが早百合っぽいよな。

『まったく・・・直樹が見ていいのはあたしだけなんだからね!』

『はい・・・肝に銘じます』

ん？直樹は気づいてないみたいだけど、今、早百合デレなかったか？デレたよな？まさかのツンデレ属性か!？

いやぁ早百合にしろ直樹にしろ、意外な一面が見れたな。

ふと時計を見ると夜中の1時を回っていた。今日は酒はでなかったけどさすがにもう眠いな。

『とにかく、もう遅いし寝ようぜ。実央は俺が部屋に連れていくよ』

『そうだね。じゃあおやすみなさい』

『おやすみ』

あれ？あれ？あいつら俺の部屋に入ったよ。しかも二人で？どうしろってんだ。

とりあえず実央を抱き上げて部屋に連れていく。体重はそんなになり実央だが、やはり眠っていると重かった。

やっと部屋についてベッドにそつと寝かせると、実央が俺の首に腕を回してきた。多分無意識だろう。しかし割と力が強くて引き離せない。

『・・・離れたくないってか。しゃあねえな』

どうせ他の部屋で寝ても勝手に入ってくるし、今夜はここで一緒に寝てもいいか。

ベッドに入り、実央をそつと抱きしめた。

## 26、みみ！ミミ！耳いい！！

『ふああ・・・』

『おっ、実央も起きたか。おはよう』

『おはよう圭佑』

時刻は既に10時半。長期休暇になると必ずと言ってもいいくらい起きる時間が遅くなる。それは今年も変わらなかった。

『朝ごはん作ろうか？』

実央が聞いてきたが、そんなに腹も減ってないし、早百合や直樹がまだ起きていないようなので昼まで待つことにした。

実央は眠たそうな目をこすりながらキッチンの冷蔵庫へ向かい、中から牛乳を取り出す。新しい紙パックを開け、コップには注がずにそのまま喉を鳴らしながら半分ほど飲んだ。

『ぷはっ』っ息づきをする様子がなんとも可愛い。

『圭佑も飲む？』

『飲む』

俺は実央から牛乳を受け取り、一気に飲み干した。

『あたしお風呂に入ってくるね。昨日は入り損ねちゃったから・・・』

実央はそう言って風呂場へ行った。その後すぐに早百合が顔を出した。

『おはよ。あれ、実央ちゃんは起きてなかった？』

『実央なら風呂に入ってるよ』

『そう。なら、あたしも入ってこようかしら』

早百合も風呂場へ向かった。うちの風呂は広いから問題無く入れるだろう。直樹はまだ起きてこなかった。

俺はなにもせずに、ただぼうつと窓の外を眺める。天気は晴れだが部屋の中でも十分に寒かった。

『・・・俺も風呂入ってえな』

そう思った矢先に風呂場から二人がはしゃぐ声が聞こえてくる。  
なんてうらやま・・・ゲフンゲフン。楽しそうだな。

直樹が起きてきた。その顔は、風呂場の声の影響であからさまに変形していた。直樹を指差して俺は言う。

『妄想禁止っ!!』

『なんでだよ?!』

---

風呂から上がった実央と早百合は部屋着だった。今日は何もするところがないし、どこにも行く宛てがない。

『たまには朝風呂もいいもんね!』

だからといって風呂上がりにビールはどうでしょう、早百合さん？  
『ぷっはあ〜〜!』とオヤジみたいな声をだして、もはやキャラが壊れている。

『あっ、そっか、牛乳はさっき飲んじゃったんだ。買ってこなくちや』



実央はまた牛乳を飲むつもりだったのか。まあビールよりは定番だな。

さてと、俺も風呂に入ろう。風呂場へ向かう俺に早百合がすれ違い様に耳打ちした。

『実央ちゃんっていい乳してるのね（笑）』

なっ！このオヤジめ！

『ぷはっ、うまい！』

風呂から上がるまでの十数分の間に何があったんだ……。リビングでは俺を除く全員が酒を飲んでいた。もちろん実央もな。テンションだけならもはや夜中だな。

ちなみに実央が梅酒、直樹がビール、早百合が日本酒だった。

『お前ら、酒好きだな』

『いいじゃない、休みの日くらい！圭佑も飲みなよ』

ほろ酔い状態の早百合に酒を押し付けられる。正直、一日がぐだぐだで終わることは予想できたが、どうせ今既にぐだってるよな。と

いうわけで俺は冷蔵庫にあった缶ビールを一本取り出した。

『てか、なんでうちにこんなに酒があるんだ？』

『ああ、あたしん家が酒屋でね。ちよつとぱちつてきた』

なんと、早百合の意外な家業が発覚！なるほど、学生のくせに日本酒が好きなのも納得がいく。しかしこの量で「ちよつと」とはな・・・。

『圭佑くっ！』

『ぐはっ?!』

実央がのしかかるように抱き着いてきた。軽くてよかった・・・。じゃなかったらこの勢いなら押し潰されて伸びていただろうな。実央は嬉しそうに耳や尻尾を動かしている。そう、まるで猫のように。

『え、尻尾・・・?!』

『圭佑♪にゃん』

『実央・・・その耳とか尻尾とかどうしたんだ？』

いつの間にか実央に猫の耳と尻尾が生えていた。俺の問いには早百合が答える。

『ああそれね、なんか似合いそうだなーって思ったから持ってきたやつを着けてみたの。実央ちゃんノリノリだよ』

全く・・・人の嫁で遊ぶなよな。

『圭佑えん・・・ぺろぺろ』

『わっ！実央！やめろって』

実央が突然俺の顔を舐めてきた。愛情表現のつもりだろうか・・・。

『や、め、ろ、っ、て、ば・・・！！！！』

引きはがそうとした瞬間、実央の口が俺の口を塞ぐ。そしてその勢いで押し倒されてしまった。

『~~~~っ！』



## 27、ずっと

日は進み……。

——大晦日。

その年の最後の日であり、一年を締めくくる日。そんな日でも、俺の側に実央がいるという「日常」は変わらないのだ。

思えば、実央と出会ってからまだ数ヶ月しか経ってない。しかし当初の「非日常」はもう微塵も見られない。

『圭佑、今年ももう終わりだね』

『ああ、一年ってあっという間だよな』

ただ、会話の受け答えや行動に対する反応はさほど変わってはいない。なぜか最初から家族、まさに兄妹のように、実央は振る舞っていた。

『家族……か』

俺は一人暮らしで孤独な毎日だった。寂しかった。共に生活を有する人が欲しかった。だから実央のこと、すんなり受け入れられたん

だな。

『なあ実央』

『なあに？』

『俺のことほんとに好きなのか？』

『今さら何言って・・・、あ、もしかして、クリスマスの夜のこと思い出したの・・・？』

実央の言う通り、俺はクリスマスの夜に遭遇した非日常を気にしていた。あの時なんであんなことを叫んだのか、自分でもわからない。『お前じゃなきゃだめだ』と。勢いかもしれないが、あれは兄妹のような間柄で発するような言葉じゃない。

ようするに、俺は、恋愛対象つまり彼女として実央を愛してる、その実感がまだ掴めていない。

『あたしは・・・間違いなく圭佑が好きだよ？だから疑わないで・・・』

実央が俺の目を直視してそう告白する。その眼差しはなんだか寂しそうだった。

そっか、実央がいつでも俺のことを好きだと言えるのは俺を100%信じていたからだっただ。俺はそんな実央を疑ってたんだな・・。

『・・・ゴメン。実央・・・、実央は俺の恋人だよな。わかりきってることだよな。疑ってすまん、お前のこと信じるよ』

『うん♪わかればよろしい！でもはつきりしなかったのはあたしのせいでもあるから、仕切り直しね』

実央が俺に向かい、手を差し出す。

『圭佑、あたしの恋人になってくれますか？』

『ああ。恋人になろう』

俺は実央の手を握り、聞き返す。

『実央、こんな俺でも構わないか？』

『もちろん♪』

俺たちは改めてお互いの気持ちを確認し合った。これで俺の迷いも消えた。しばらくは非日常が続くだろうが、それも一つの刺激だ。俺は実央を抱き寄せ、実央も俺を強く抱く。

『ずーっと・・・そばにいるから・・・もういなくなったりしないよ・・・圭佑のこと・・・好きだから・・・』

実央の俺を抱く力が強くなる。

そこで俺はあることに気がついた。

『・・・実央』

『前より胸の弾力が・・・』

『ばかあああああああ！！！！！』

俺の脳天に実央の強烈な頭突きが炸裂した。

『圭佑、ここはシリアスシーンなのよ！』



俺は断末魔に実央がそう言ったのを聞いた。

目が覚めると、そこはベッドの上だった。どうやら気を失っていたようだ。部屋には誰もいなく、しん——と静まり返っている。静まり返って……？ いや、おかしい。この家にあの3人がいて、騒がしくないわけがない。俺抜きでもしっかり盛り上がるはずだ。

『ということは……！』

俺はベッドから飛び出し、家の中を巡った。が、予想通りだれもいなかった。どうやらでかけてしまったようだ。

『くっそー……俺を置いてどこ行っただ、あいつら？ 直樹と早百合の電話番号は知らないし、実央はケータイ持ってないし……』

完全に連絡がとれない。ったく、これじゃあ合流のしようがないぞ。どこに行ったのかはわからないが、とりあえずその辺にいるかもしれないし、家を出て行きそうなところを回ることにした。

## 28、え・・・そんなに？

『ねえ、ほんとに圭佑置いて来ちゃって大丈夫？』

実央たちは年越しそばの材料を買いに近所のスーパーに来ていた。実央は気絶した圭佑を置いて一人遺してきたことを気にしているようだ（ただ、気絶させたのは実央なのだ）。

どういう成り行きかを説明しておく、圭佑に強烈な頭突きを食らわした実央が、圭佑が動かなくなったことを早百合に報告したら、『だいじょぶだいじょぶ。むしろうるさいのが落ち着いたから今のうちに買出しね』ということまで今に至る。

『大丈夫だったら。あいつなら目覚めても実央ちゃんを探しに来るから』

『そうだよ。今はあいつのことほっとこうぜ』

二人して圭佑のことはあまり興味がないようだ。実央は常に圭佑はいないかとあちこちをきよろきよろ見回している。渋々買い物に付き合うものの、やはり圭佑のことが心配で仕方ないようだ。

俺は道端でゼエゼエと息を切らせて立ち止まっていた。

『まったくよお……。あいつらで行きそうな場所ってあとどこだ・・？』

俺は家をでてから、ゲーセンを初め実央たちが行きそうなところを全速力でランニングしながら回っていた。おかげで真冬にもかかわらず汗だくだ。

『ん？スーパーか……。あいつらくるか？一応入って探してみるか』

立ち止まったところがちょうど近所のスーパーだったため、最後の望みをかけて入ると、

『あっ、圭佑！』

『おっと?!』

実央たちが出てくるところだった。これぞ灯台元暗しってやつか。こんなところにいるなんて全然想像もなかった。どうもイメージ的に遊び歩くことしか思いつかない。

『まったく、見つけるの遅すぎでしょ。実央ちゃんすつごく心配してたんだから』

『いや、置いてったのはお前らだろ。実央はまだしもお前ら2人は確信犯だろうが』

『あれ、ばれてたのか。てかお前やっぱり実央ちゃんにはとてつもなく甘いな』

うるせ。とにかく合流できてよかった。しかしなんでこんなところにいるんだ？ここに3人でくる理由がよくわからない。なにか買うものでもあっただろうか？

『年越しそばの材料を買いにきたのよ』

『え？あれ、うちになかったっけ。4人分くらいはあったはずだぞ』

『なに言ってるの。あれだけで足りるわけじゃない。圭佑って小食だっけ？』

なん・・・だと・・・？まさかどんぶり一杯のそばを食い足りないというのか、こいつらは。

『あ。でもあたしも同感だよ』

実央まで早百合に同意する始末・・・。今後の実央の食費が大いに心配だ。いつもそんなに食べてたっけな？いつのまに大食い娘になっちゃったんだろう、俺の嫁は。お兄ちゃん、いや、旦那は悲し

いよ。太らないでくれよな。

『だから10人前買ってきた』

『さすがに食い過ぎだろ!!』

これはツツコミせざるを得ないだろ。てか、その金はどこからでてるんだ？うちのじゃないだろうな。

『圭佑の財布からちよつと拝借したよ』

『くそがあああああ!!』

どうりで財布に入れたはずの札がなくなっているわけだ。まったく、今月はもう余裕ないんだよお・・・。

『まあいいじゃん！これでお腹いっぱい食べれるでしょ？』

『まあ実央がいいなら問題ないけどな』

あ、やべえ、俺やっぱりデレてるな。多分今だかつてないくらいデレデレな顔してるだろうな・・・。

『そこっ！圭佑デレんなっ！！』

やっぱり。

28、え・・・そんなに？（後書き）

新しく連載している「侍シューゴの異世界探険」も是非読んでくだ  
さいませ！！

## 29、らしいこと？

ささいな「俺イジメ」のあと、家に戻った俺たちは、夕飯の時間まで適当に好きなことをしてすごした。夕飯の支度は料理が得意な実央と早百合がすることになった。実央の腕は確かだから手伝わなくても問題ないだろう。

俺はリビングでテレビを見ている。いつもこの時間はそんなに面白い番組は無いが、時期が時期なので、どのチャンネルも特番ばかりだ。カチカチとりモコンをいじってあてもなく色んな番組を見る。

『なあ。お前はなんで実央ちゃんと付き合ってるんだ？』

唐突に直樹が尋ねてくる。直樹はぼうっとテレビを眺めていてつまらなさそうだった。

『なんで・・・って、そんなこと言われてもなあ・・・。実央は俺の家族みたいなものだし。あ、でも恋人として見てないわけじゃないんだけど、んゝ何て言ったらいいかな・・・』

俺の場合、実央との馴れ初めが唐突すぎて説明しようがない。その上、状況が普通の高校生とは掛け離れすぎている。いきなり現れて『あなた嫁になる』なんてことが日常的にあったら世の中がリア充で溢れかえるだろうよ。



俺は言葉を濁し、低く唸りながらいい表現がないかどうか考える。直樹は相変わらず上の空でもう一度俺に問う。

『実央ちゃんのこと好きじゃないのか？』

『そんな訳あるかよ。実央のことは大好きだよ。他に何もいらなくらいな』

柄にもなく恥ずかしい台詞だった。かつて冷静に振る舞っていた俺が、今では実央に関することなら熱くなったりデレデレしたりと、ありえないくらい感情的になっている。だからどんなに恥ずかしい台詞でもスラスラと言える。何より実央を愛してるっていうことは確信を持てる。

『だいたい、好きでもないかぎり知らない女の子を家に居座らせるかよ』

俺はこの言葉に少しの矛盾を感じた。言う通りならば、なぜ実央が現れたときに追い出さなかったのか。

しかしその矛盾はすぐに納得することができた。だれが聞いても矛盾だらけだが、俺はそれでいいと思っている。だってそのおかげで大好きな実央が傍にいるのだから。

俺は本能的に実央のことを守ってやりたいと思っていたはずだ。

『俺は実央が悲しまないようにならずと守ってやりたいと思ってる。実央はもう一人にしない、あいつは一人で生きていけるほど強いのに、一人でいるのが長すぎたんだ。だから俺が傍にいてやるんだ』

俺の話を聞いていた直樹は、安心したように笑みをこぼす。どうやら実央の気持ちを俺が台なしにしていなか心配だったようだ。

『その言葉を聞けてよかったよ。お前もちゃんと実央ちゃんのこと見てるんだな。俺は実央ちゃんがお前にゾッコンなのは見抜いてたぜ』

何を今さら。

『恋人らしいこと、ちゃんとしてやれよ？実央ちゃんが誘ってくるまえにお前からな』

『らしいこと?？』

『だからさ（コソコソ）・・・』

首を傾げる俺に直樹が耳打ちする。

その内容を聞いてすぐ後にリビングに入ってきた実央と目が合った俺は、ひたすら赤面するしかなかったのだった。

実央は、なんのこと？と首を傾げていた。

### 30、願いと決意

『何の話してたの？』

『べつに大した話じゃないから気にするな。・・・てか聞かれたくねえ』

『何か言った？まあいいや。おそばできたよ』

さっきまで面と向かって言えないような話をしていたからびびったぜ・・・あの様子なら聞かれてないよな？多分大丈夫だろうけど。くっそ直樹のやつ、何言わせるんだよ。

でも早百合じゃなかったのは幸いだ。あいつに聞かれたらほんとになに言われるかわからん。一日中いじられることはまず間違いないだろうな。なんであんなに性格悪いんだ、あいつ。それに比べてうちの嫁はよくできてる可愛くていい子だなあ！

『あんたそれ、全部聞こえてるわよ。てゆうか、よくも性格悪いなんていつてくれたわね』

『はう?!』

なんてこった・・・。全て早百合に聞かれてしまった。思ったことが口に出る俺の悪い癖だ。よく言えば素直なのだが、今の状況では

褒められたもんじゃない。

早百合に締め上げられた俺は晩飯前に土下座で謝ることになった。

『もう性格悪いなんて言うんじゃないわよ。わかった？』

『ハイ。スミマセンデシタ』

『これからは清らかな心の持ち主として崇めなさいよ！』

『ショウチイタシマシタ、ジョオウサマ』

・・・なんか趣旨がズレてるな。てかこんなこと言ってる時点で性格わりいよな。

ま、悪い癖のせいでこのあともう一度土下座することになったんだが。

夜9時。

何はともあれ、無事に今年を終えることができそうだ。ただ、年越しそばが多すぎて、俺と直樹が少し苦しいことになっているだけだ。これは眠れない、いや、いっそ眠らなくていいか、大晦日だし。実央と早百合はピンピンしてるんだけどな・・・。

なんか大晦日の夜から元日の早朝にかけて特別な感じしないか？今日くらい公認でオールできる、みたいなさ。普段は眠いときはすぐに寝るんだけど、なんだか寝てしまってもったいないような。俺だ

けかな？

そんなこんなではちきれそうな腹を落ち着かせるために食休みして  
いると、実央が思わぬ提案をした。

『ねえねえ、11時くらいから神社まで出かけない？歩いていったら年越しすちよっと前くらいには着けると思うんだけど』

『神社行っでどうするんだ？』

『そんなの、初詣に決まってるじゃない！』

年越し直後に初詣か、いいかもしれない。夜中だし人はいないだろうからゆっくり静かにできそうだ。全員賛成で夜中の初詣に行くことになった。

2時間後には少しくらい消化が進んでいるだろ。腹重い。

神社につくと、辺りは真っ暗。近くに街灯など無く、月の光だけが道を照らしていた。境内に人はいなく、雑音もなく静まり返っていて、俺たちの歩く音が鮮明に聴こえる。ここには、実央、早百合、直樹、そして俺しかないのだ。

もともとさびれた神社の為、ほとんど来る人がなく、お守りや絵馬などの販売も随分前からされていない。あるのは賽銭箱だけ。

『真っ暗ね・・・』

『そうだな。手、離すなよ』

直樹と早百合ははぐれないように手を繋いで歩いている。実央は少し寂しそうな顔をしているけど、どうしたんだろう。俺は寒いので手をコートのポケットに入れている。

『あ、あと2分くらいで0時だよ』

実央が腕時計を見てつぶやく。

『もう今年は終わっちゃうんだね』

『ああ。でも来年はもっといい年にしような』

『そうね。今年はほんと忙しかったしね』

『おかげで楽しい年だったけどな』

皆、それぞれ思うことを口にする。手には100円玉が握られている。そして時計の針は午前0時を迎える。

『3。2。1・・・0時だよ』

『明けておめでとう!』

その言葉と同時に一斉に賽銭を投げる。今年最初の願いだ。

『ね。ね。圭佑はどんなお願いしたの?』

『実央はどうなんだ?』

『あたし? あたしは・・・圭佑とずっと一緒にいられますように。つて。ねえ、圭佑は?』

『秘密。教えてやんね』

『ああっ!ズルイっ! あたしは教えたのに! 教えてよ!』

その後もしばらく神社で談笑して過ごした。俺の手には100円玉に替わって満面の笑みを浮かべた実央の小さな手が握られている。今までの俺の人生で一番楽しい初詣だったから、今年はきっと楽しくなるだろうな。

そのためにもこの願いはずっと忘れないでおこう。神様が叶えてくれなくても、自分で実現するために。

——実央を悲しませない、強い男になれますように——



### 31、不穏な動き？

『だあゝ疲れたゝ・・・』

『お疲れさま♪』

2月7日。

楽しかった冬休みもあつという間に明け、俺達学生に定期試験という悪夢を見せるこの時期。

一週間に及ぶ猛勉強（ほとんど実央に教えてもらった）と俺の嫁、実央の励ましによりなんとか最終日の今日まで乗り切ることができた。要するに、99%実央のおかげだ。1%は俺のやる気な。

『手応えはどうだった？』

『徹夜で勉強しただけあつてまあまあ埋まったぜ』

一番苦手な教科である数学をなんとかするために昨日は夜通し勉強していたのだ。夜、部屋で二人きりで勉強。何が起こっても不思議ではないが、結局何も起こらなかった。

ちなみに実央はもとからできる子だからテストなんて苦にもならない。だからこうして涼しい顔でいられるのだ。実際、前回のテスト

では見事に学年トップの座に君臨した。

『実央ちゃん！』

恋人とほのぼのな空気に割り込んでくる早百合。頼むから空気読んでくれ。

『あれ、直樹は？』

『事情があつてね、先に帰した。それより実央ちゃん・・・』

『うん、ちょっと待っててね。圭佑、今日もちっと帰り遅くなるけど、いい？』

『別に構わないぞ。晩飯は作って置いとけばいいんだろ？』

『うん！ありがと！じゃあね〜』

そういつて早百合とどこかに行ってしまう。

ここ最近、実央と早百合は毎日二人でなにかしている。実央のことだから危ないことはしてないだろうが、いくら聞いても秘密だって教えてくれないことで余計に気になる。俺に言えないようなことってなんだ？

直樹も同じような状況だろうし、こんど聞いてみるか。でもあいつ

の考えはあんまりあてにならないけどな。

『早百合がなにしてるかって？知らねえよそんなの、教えてくれないんだから。あああ・・・なにしてるんだゆりりん・・・』

聞きたくもないようなニックネームはとりあえずスルーしておいて、直樹も相当ほっとかれてるみたいだな。どうやら俺と同じ程度の情報しか知らないようだし、ここはゆっくり話し合うことにしよう。

『最近、早百合のやつ俺に冷たいんだよな・・・なんかいけないことしたっけなあ・・・』

『お前いつも調子に乗ってるから愛想尽かされたんじゃないね』

冗談まじりにそんなことを言ってみたが、直樹には少々きつめだったらしくさらに落ち込んでネガティブになってしまった。挙句の果てにはぶっ飛んだ想像もしてしまって手が付けられない。

『まさか他に好きな人ができたとか・・・いや・・・そんなことは・・・というか考えたくない・・・』

一向にやる気が起きない俺はしばらく様子を眺めていた。すると突然、直樹は何かを思い出したように顔を上げた。

『何か心当りでもみつかったのか？』

『圭佑……。実央ちゃんさ、きつと好きな人がきたんだ、だから早百合が付き添って応援してるんだ。うん、よし、納得！これなら説明がつく！』

待て待て待て待て待て待て待て。俺は直樹が言ったことを全面否定する。だってそりゃそうだろ、俺の嫁が浮気なんてするわけがない。天変地異が起きたってそんなことはありえない。

『直樹……。早百合がいなくて辛いのはわかるが。だからといって実央に俺以外の好きな人ができるわけないだろ？それにそんなことが起こる確率は早百合のほうがずっと高い』

友達には悪いが止めを刺させてもらった。俺の嫁を疑った罰だ。直樹はすっかりうなだれ、orz↑こんな風になってしまった。俺は無視して教室をあとにする。

『まさかな……。実央が、そんなことあるわけないよな』

### 32、愛のお菓子は甘酸っぱい

2月13日。

世間の中学生が皆受験やらなんやらで焦っているという時にゆつくりできるというのはなかなか優雅なものだ。俺はお気に入りのブラックコーヒー・・・ではなく午後ティーを飲みながらゆつくりと時間が過ぎるのを待つ。

今日も実央は早百合とどこかへ行っている。ここ最近実央と一緒に帰っていない。まったく、お兄ちゃんは寂しいよ・・・。

そんな実央が帰ってきたのはいつもと違って夜遅くになってからだ。疲れて溜息をついていたが、その顔はまんざらでもなく嬉しそうだった。

俺はこの間直樹と話したことを思い出した。

(きっと実央ちゃんに好きな人が・・・)

そんなわけないよな、と思いつつやはり気になる。聞こうか聞くまいか悩んでいたところで俺の悪い癖が発動して考えが口に出てしまっていた。

『ちょっとちょっと・・・そんなわけないよ！あたしが好きなのは圭佑だけだよ？』

俺は一瞬、しまったと思ったが、せっかくだしこの際追求してみることにした。

『直樹も言ってるんだ。あいつは早百合だけだな。でもこんなに長い期間内緒の行動をされるとやっぱり気になるだろ』

『だから・・・そのことはまた話すっていつてるでしょ?・・・あたし疲れたから寝るね。おやすみ。・・・・・・ほんと鈍感』

実央は逃げるように部屋へと言ってしまった。なにやら呟いた言葉は俺には聞こえなかった。

翌日。

実央は相変わらず何食わぬ顔で起きてきて、いつものように朝飯を作って俺を起こしにくる。そして朝飯を食べ終わると学校に行く支度を始める。

『実央ー。学校いくぞー』

『うん、ちょっと待ってー』

いつもの時間に家を出て、いつもの速度で歩き、始業ギリギリのいつもの時間に学校へ到着。そんな俺の日常。

『寒い。えいつ、くつついちゃうもん！』

『じゃあねえやつだな』

こんなラブラブですら、もう日常。

実央が転校してきて早々に公言してくれたおかげで、公認カップルということになって皆に疎まれたりすることがない。非リア充同盟も直樹が抜けて解散になったらしい。あいつらも諦めない心を学んだようだな。

休憩時間に交わされる会話、授業中のアイコンタクト、じゃれ合い、それら一日の全てがいつもとなんら変わりがなかった。ただ一点を除いて。

---

放課後。

教室にて俺は用事があるからとどこかにいってしまった実央を待っている。かれこれもう1時間が過ぎ、教室内にいた生徒達はもう1人残らず帰ってしまった。ちなみに直樹は早百合に呼び出されたと

言ってビクビクと彼女との待ち合わせ場所へ向かった。

さすがに探しに行ったほうがいいかと思った直後、教室の扉が開き、実央が入ってきた。

『お、やっときたか。長かったな。いつものやつじゃなかったみたいけど』

『う、うん。今日は早百合ちゃんも用があったし、それに今日からその必要もないし』

実央はいつものような笑顔を見せず、なんだか緊張しているようだった。手を後ろで組むようにして、何やらモジモジしている。理由は解らないが。

『どうした？ 具合でも悪いのか』

『あ、いや、そんなことはないけど・・・』

『そうか？ じゃあ帰ろうか。久々に嫁と帰れてうれしいよ』

俺が教室に置いていた実央の荷物を取りに行こうと立ち上がると、実央が呼び止める。



『あ、あ、あの！あのさ・・・！』

『？』

とりあえず荷物を後回しにして実央に近づく。少し実央の頬が赤く染まっている。夕日のせいだろうか？実央は伏し目がちに話す。

『その・・・ごめんね、ここ最近一緒にいられなくて。こ、これは、そのお詫び・・・！』

実央は顔を上げ、後ろ手に持っていた物を差し出す。俺はそれを受け取って初めて今日がなんの日であるかを思い出した。

『あ・・・今日、バレンタインだった』

すっかり忘れていた。なぜなら、いままでこの日に女の子から何か貰うなんてことが一切なかったから。それがこの日の日常だった。

『これ・・・作るために・・・毎日・・・』

『別に、作れなかったわけじゃないからねっ！お菓子作りだけ苦手だなんてことないもん！』

その言葉自体が白状しているようなものだが、今はそんなことにツッコミをいれている場合ではない。俺の嫁が、毎日自分のためにお菓子作りの練習をしてくれていた。しかもその集大成がここにあるのだ。これで嬉しくないわけがない。

『ありがとな・・・実央』

実央の頭を撫でてやりたくなった。俺にはこのくらいしか、感謝の方法が思いつかなかった。だが実央も、それだけで十分だったようだ。実央の顔は恥ずかしがって下を向いていたが、明らかに夕日のせいなんかじゃなく真っ赤に染まっていた。可愛くて、優しく、最高の嫁が、今俺の前にちゃんという。ちゃんと触れられる。

俺と実央のストーリーで初めて、甘酸っぱいエピソードを体験した。

『ちなみに内容量はカカオ99%だよ☆』

『めっちゃ苦えっ!!!』

### **33、実央の物語（前書き）**

32の実央視点です

### 33、実央の物語

『どうしたの実央ちゃん？元氣ないね』

早百合ちゃんだ。この子はいつも突然に話しかけてくるの。ま、すごく鋭いからあたしが今悩み中なのを見て話しかけてきたんだろうけどさ。その点では早百合ちゃんにはすっごく感謝してる。

『あたし・・・圭佑の負担になってるんじゃないかなって、最近思うんだ。早百合ちゃん、あたしどうしたらいいかな・・・？』

圭佑は見ず知らずだったあたしを家に迎えてくれたし、優しくしてくれるし、いつも側にいてくれる。でもあたしは、そんな圭佑に何の恩返しもしてあげられない。それじゃあただ圭佑にくっついてるだけなんだよ・・・。そんな関係なんてあたしは納得できない。

そんなあたしに早百合ちゃんは言った。

『じゃあさく、今度のバレンタインデーにチョコ作って渡そうよ！あたしも直樹にあげるつもりだし、一緒にどう？』

『なるほど・・・。そうだね、それなら時季的にもあってるし。ありがと、早百合ちゃん！がんばろうね！』

『じゃあ放課後、あたしんちで練習も兼ねて構想とか考えよ！実央ちゃんの腕前も気になるしね♪』

こうしてあたしのチョコレート作りの修行が始まった！

『んゝ……。実央ちゃん、ちゃんと「砂糖」入れたよね??』

『そのはずなんだけど……。なんでだろう……。』

『『なんでこんなに「塩」辛くなるんだろう……。』』

チョコ作りは一向に上手くいっていなかった。あたしの作るチョコは、ドロドロになったり、辛くなったり、酸っぱくなったり、とにかく原因不明の失敗ばかりが続いていた。料理には自信があったんだけどなあ……。これじゃバレンタインに間に合わないよ。

一旦チョコを諦めて、ケーキやクッキーにも挑戦してみたけど、結果は似たり寄ったりでケーキは膨らまず、クッキーはボロボロ。あたし才能ないのかな……。

そんなこんなでチョコが一番マシだから繰り返し挑戦。

『とりあえず形は置いて味からね。実央ちゃんの味の秘密を徹底的に探らなくっちゃ』

「味の秘密」ってなんだかカッコイイけどあたしの場合は原因を突き止める意味だからあんまり嬉しくないね。

『そういえば早百合ちゃんのチョコは？もう作ってあるの？』

『ううん、あたしの分は前日に実央ちゃんと一緒に作るよ。この前の練習では上手くいったしね』

『そっか。ごめんね、あたしが下手なせいで巻き込んだじゃって』

早百合ちゃんはふるふると首を横に振って気さくに答えてくれた。

『いいのよ、友達じゃない。困ってるときは全力で助けるのが友達ってもんよ』

友達・・・かあ。嬉しいな。友達がいた記憶なんてなかったから。早百合ちゃんはあたしのことちゃんと友達だって認めてくれてたんだね。

手伝ってくれてる早百合ちゃんのためにも頑張らなくっちゃ!!

『んん！しょっぱいっ！』

『実央ちゃん！』

今日も早百合ちゃんの家でチョコ作り。相変わらず全然上手くいかなくてここんどこ毎日通いつめてる。もちろん圭佑には秘密にしてあるし、圭佑が気付いた様子もないみたい。でもホントはちよつとくらい気付いてもいいんじゃないかな・・・なんて思ったり。圭佑にぶいけどね。

『晩飯は作って置いとけばいいんだろ？』

『うん！ありがと！じゃあね〜』

でも。そんな期待しなくてもいいかな。

あたしを信じて帰りを待ってってくれる、純粋な圭佑が大好きなんだから・・・／／／

あ！こんなこと圭佑に言っちゃだめだよっ！！

『なーにやけちゃってんのかなあ〜？』

『っ！！な、なんでもないよ！』

学校の下足室まで来たところで早百合ちゃんがそんなことを言って

きた。もう・・・いつつも油断したところをついてくるんだから。

『顔赤いんだけどなく!』

『つもう! やめてよう!』

『で・・・できた・・・の?』

『そ・・・そうね・・・完成ね』

キッチンのテーブルには完成したハート型のチョコレート。ちょっとベタだけど、初めて作ったにしては上出来だね（初めてとは言っても、もう20個ほど失敗作は作ったけど・・・）。

あとは明日、圭佑に渡すだけ・・・。

作ったチョコレートを冷蔵庫にしまい、片付けを始める。

『じゃ、明日は計画通りにね! あたしは直樹を呼び出すから実央ちゃんはその後にね』

『おっけ! 圭佑よろこんでくれるかなあ・・・!!』

『あいつならきつと泣いて悦ぶよ』

なんか字が違う気がするけど・・・でも・・・、明日が楽しみだ



なあ・・・！

気合を入れて仕上げてたせいで帰りが遅くなっちゃった。

『実央。好きな人でもできたのか』

『ちよっとちよっと・・・そんなわけないよ！あたしが好きなのは圭佑だけだよ？』

まさか圭佑がこんなこと言ってくるなんて思いもしなかった・・・。  
ここまでくるとちよっと呆れてくるわね・・・。明日で挽回しなく  
ちゃ。

『・・・あたし疲れたから寝るね。おやすみ』

ほんと鈍感。

なんでだろ。いつも一緒にいるのにドキドキするよ・・・。バレン  
タインダーにこんな魔力があったなんて。

教室の扉の前でもう小一時間立ち尽くしてた。用事があるって言っ  
て出てきたけど流石にもう待たせすぎだよね・・・。行かなきゃ。

そうよ、いつものようにすればいいんだから！

『お、やっときたか。長かったな。いつものやつじゃなかったみたいだけど』

圭佑はいつもの笑顔で迎えてくれた。なんだかホッとして、緊張がほぐれていく。これならいけそう。

『その・・・ごめんね、ここ最近一緒にいられなくて。こ、これは、そのお詫び・・・！』

『別に、作れなかったわけじゃないからねっ！お菓子作りだけ苦手だなんてことないもん！』

後ろ手に持っていたチョコレートを手渡す。圭佑のために時間をかけて作ったチョコ。素直には言えなかったけど、なんだかやりきった・・・と思う！

『ありがとな・・・実央』

圭佑は頭を撫でてくれた。優しく、頼りになって、カッコイイ圭佑・・・。

『とけるう〜』

『あたしが嫁であることに感謝しなさいな。実央ちゃんのは甘さの概念を失くす処置をしたけど、あたしのはそれに対抗して激甘にしてあるのよ!』

『早百合い〜ほっぺが落ちるほどあまいよ〜』

『さてと・・・あっちも終わったかな。ほら、帰るわよ。今までお預けした分、今日はサービスしてあげるから☆』

### 34、どこ行きたい？

『どう？ちゃんと実央ちゃんからチョコもらえた？』

『おう、もらえたぜ。お前だろ、実央を差し向けたのは？』

実央からチョコレートをもらった翌日の朝、教室で早百合が話しかけてきた。そういえば実央はいつも早百合とチョコを作っていたんだ。いかにもお菓子作りが苦手な様子を見せていた実央だったが、その真偽を確かめるべく早百合に訊ねた。

『ああ、実央ちゃんね、いくら練習しても甘いチョコにならなくてねー。だから甘さは諦めてビター系にしたんだよ。まったく苦労させられたわよ』

なるほど、あの苦さにそんな理由があったとはな。でもビターチョコってたまに食べると美味いよな、実央のつくったやつなら尚更だけど。マジ美味かったぜ。

『早百合は直樹にあげたのか？呼び出してたみたいだけど。あいつビクビクしてたぜ』

『もちろんあげたわよ！でもビクビクしてたってどういうこと？あたしなんかしたっけな？』

そんなこんなで話していると直樹がいつもの乱入。めちゃくちゃ焦ってるけど、早百合が俺に取られるとか思ってるんだろ？俺には実央という愛でることに人生を捧げてもいい嫁がいるというのに。こいつも人間不信になってきているんだな。・・・ところで今日の俺、なんかデレてないか？

『早百合！俺は一生お前についてくぜー！！』

『はいはいわかったからちょっと落ち着きなさいな』

直樹は早百合になだめられている。こいつ絶対数年後には尻にしかれてるだろうなと思う。M気質でもあるのか？早百合はたぶん、というか絶対Sだけど。そういう点では一番合ってるのかもしれないな、この二人は。

俺と実央は・・・無いな。こんな特殊な関係ではないだろ。あったら困る。実央がSだなんて想像もしたくないぜ。でもMならいいかも。

『あんたも実央ちゃんにお返ししなきゃだめよ？それがたとえ恋人同士じゃなくても礼儀ってモンでしょ』

『あ、そっかホワイトデーとかあったな。今まで気にしたことなかったから忘れてた。うーん・・・そーいや俺もお菓子とかは作ったことないな』

実央が長い時間をかけて最高のバレンタインを用意してくれたんだからな。俺もそれ相応のお返しをしなくちゃいけないんだが、ホワイトデーといったらやっぱりチョコレートに対抗してクッキーとかだよな……。買って渡すのもアレだし、ここは手作りってことになるのか？

『わかってないわねー。プレゼントするものは形があるものとはかぎらないわよ？ あんた達一緒にすんでるくせに全然デートしないって聞いたわよ？』

『あ……。デートか。いつも一緒に居るから思いつきもしなかったな。しかしいきなりそう言われても今の時期どこに行ったらいいか……。早百合、どこかいそこあるか？』

『それは男の考えることでしょ！ でも行き先だけ先に考えるなら実央ちゃんにどこか行きたい場所がないか聴いてみるのもいいかもね。サプライズではなくなるけど、今の実央ちゃんならあんたと出かけられるだけで嬉しいと思うわ』

なるほど……。じゃあ学校ではちょっと聴きづらいから家に帰ってから聴いてみるか。どこがいいかな、場所が決まったら予定も作らなきゃな。

デートか……。いつ以来だっけ？

そんな俺の耳に早百合と直樹の会話が飛び込む。

『ねえ直樹、どう思う？ 実央ちゃんってサプライズに喜ぶ方かな？』

『女の子ってだいたいサプライズ好きなんじゃないのか？』

サプライズか・・・そうだ、あれをサプライズにしよう。前からやってみたかったことだ。

でもこれはこいつらには内緒にしておくか。実行したあとの反応が楽しみだし、なによりこれだけは自分でやりたいしな。

俺が脳内で策を練っていると、職員室まで行っていた実央が教室に帰ってきた。とっさに早百合たちに『内緒だぞ』と合図を送り、情報漏洩を防ぐ。

『実央、用事は終わったのか？』

『うん！先生から呼び出された割にはそんなに大した用でもなかったよ』

実央はやっと解放されたからか、はたまた俺の顔が見られてうれいいのか、笑顔を振り撒いている。この笑顔を見るとどうしてもやりたくなっちゃうんだよねー。

もきゅもきゅ。

『にゃふー／／／』

キンコーンカーンコーン。

『ほら！席つけー！』

担任である。いつの間にか始業チャイムが鳴っていたようだ。でも俺はポニテを放したくない！俺は実央をもきゅもきゅしていたんだ！！！！

というわけで提案。

『せんせー席替えとか出来ないっすか？俺この席じゃ授業に集中できる気しないんですけど』

『そんな面倒くさいことはせんぞ。替えた後集中できる保障なんかないだろ。とにかく席に着け。ショートHR始めるぞ』

ハイ却下ー。ちっ、実央の後ろになるように細工しようと思ったけどだめだったか。あーあ、俺のもきゅもきゅ。まあいいか、放課後ならいくらでも出来るし。

キーンコーンカーンコーン。

『けーいすけっ！帰ろ！……って、どうしたの……！？』

『フーツ、フーツ、フーツ……も……きゅ……不足……ッ  
！！』



だめだ・・・ここまで深刻な禁断症状がでるとは・・・！今すぐにでももきゅもきゅしないと精神がもたないっ！

もきゅもきゅ。

何はともあれ帰宅完了。徒歩20分間、一時もポニーテールを離すことがなかった俺は、もう中毒と言っても過言ではない。それほどあの行動には依存性があるのだ。何と言ってもあの手ざわ r（割愛）ということであのもきゅもきゅは世界を救うのだ。

えっと・・・よく考えたらサブタイトルからかなり逸れてたな。これでは読者に怒られる。のろけてばかりじゃだめだな。  
じゃあまずはデート場所だな。

『な、実央。昨日のお返しにさ、今度の日曜にデートしようか』

『エ？ほんとっ？！やったあ！圭佑から誘ってくれるなんてうれしーなっ』

『どっか行きたい所ってあったりする？俺あんまりデートスポット知らないんだけど・・・』

『そりゃいっぱいあるよ！遊園地で圭佑と一日中遊んでみたいし、見に行きたい映画あるし、買い物もしたいし、あっても水族館も行ってみたいなあ』

確かに行きたい所は多いみたいだな。まあデートらしいデートをしたことないから仕方ないな。

実央は突然の非日常に目をキラキラさせて話している。実は俺も実央とのデートがかなり楽しみだったりするのだが。

『じゃあ、一日で回れるだけ回ってみるか。俺も実央と色んなことしたいし』

そうと決まれば日曜までに急いで準備しなければ。アレのこともあるし、のんびりしてられないな。

『実央、ちょっと手だして』

『ん？こう？どしたの？』

実央の小さな手を取り、指を絡めたりしながら感触を確かめる。言っておくが俺は変態ではないぞ。ちゃんと意味があるんだ。

『いや、なんでもないよ。ありがとう』

さってと、予定はどうするかな・・・。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8482r/>

---

非日常だとうっ？！

2011年10月8日22時46分発行